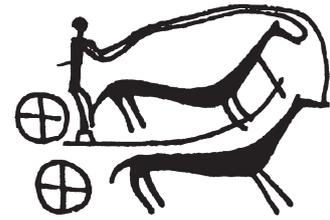


ニューズレター

Hokkaido University
Institute for the Advancement of Higher Education

北海道大学 高等教育推進機構
Newsletter No. 86



好調なスタートを切った総合入試	(4 ページ)
「教室英語表現の活用法」を実施	(5 ページ)
第3回大学院生のための大学教員養成講座	(6 ページ)
理学院の GSI 制度	(8 ページ)
クラス担任マニュアルを発行	(17 ページ)
北海道地区大学 SD 研修	(20 ページ)
CoSTEP の地域連携活動	(22 ページ)
アカデミック・マップを公開	(25 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

このたびの東日本大震災により被害を受けられた多くの皆様に、
心よりお見舞い申し上げます。

旧高等教育機能開発総合センターが1995年4月に発足する直前には阪神淡路大震災があり、今回は昨秋に高等教育推進機構が発足し、総合入試に基づく新しい総合教育が始まる直前にこの大災害と事故に遭遇し、感慨深いものがあります。

地震の直接の被害を受けた大学だけではなく、首都圏の大学まで、多くの大学の研究・教育が深刻な打撃や影響を受けています。本学では道内国立大学と連携して被災地の国立大学に水や食糧等を送る支援が新潟大学を窓口に進められました。

3月12日の後期試験には、実家が被災して家族と連絡がとれなくなったり、帰る家なくなったりした受験生に対して、大学生協が主体となって布団

や食事が用意され、校舎に宿泊してもらいました。

学生ボランティア活動相談室には、現地に行ってボランティアをしたいという学生の相談が相次いでいますが、現在は、現地に赴くよりも義援金を集めたり、支援のためのイベントに取り組んだりすることが当面の最も重要な課題であると指導し、それらに多くの北大生が参加しているとのことでした。

東日本を襲った未曾有の震災、原子力発電所の事故は、私たちの社会や生活のあり方を根本的に見直すことを求めています。社会と大学を結び、そのことを通じて学生の教育を支援してきた高等教育推進機構・各部の役割をあらためて重く感じています。

(木村 純)

巻頭言 FOREWORD

総合教育部の発足にあたって

理学研究院 教授, 高等教育推進機構 副機構長・総合教育部長 山口 淳二

本年度10月に高等教育推進機構・総合教育部長を拝命しました。この稿をお借りして、高等教育推進機構内に新しくできた「総合教育部」の役割と将来の展望について説明させていただきます。

総合入試制度の導入

北海道大学では平成23年度入学試験から、これまでの学部別入試に加えて、「総合入試」を導入しました。この制度で合格した学生は、進級先学部等を決めずに入学し、初年次教育の間に、本学の教育、研究、教員等を十分理解した上で、2年次に進むとき、自分の学びたい学部、学科等に進級することになります。「大きく入り試」とも呼ばれる総合入試による募集人員率は、本学全体の約45%に相当します(総合入試については、ニュースレターNo.84 脇田機構長の巻頭言もご参照ください)。

新しい初年次教育の体制

1) 初年次学生の所属

これまでは、入学する全ての学生は自分の所属学部等(2年次以降の進級先)ごとのカリキュラムに従って初年次の教育を受け、全学教育科目だけでなく、所属学部の専門科目も履修していました(図1

左)。今回、総合入試の導入により、平成23年度以降、初年次の学生は全て(学部ではなく)北海道大学に所属し、初年次教育として、1)全学教育のみを、2)文系と理系のみを区別する統一したカリキュラムで受けることになりました(図1右)。(理系カリキュラムのうち医学部医学科と保健学科だけは独自のものです)

約2,600名の初年次学生は(学部を区別せずに)本学に所属するので、彼らを支援・監督する実質的な組織が必要となり、平成22年10月、高等教育推進機構に総合教育部が新たに設置されました。

2) 総合教育部の発足

既存の全学教育部が主に初年次教育の企画機能(全学教育科目に関する企画、開講計画、単位の実質化等についての対応)を担うのに対し、総合教育部は教育の実践機能を担います。具体的には、1)教育課程の編成方針の企画・調整に関すること、2)

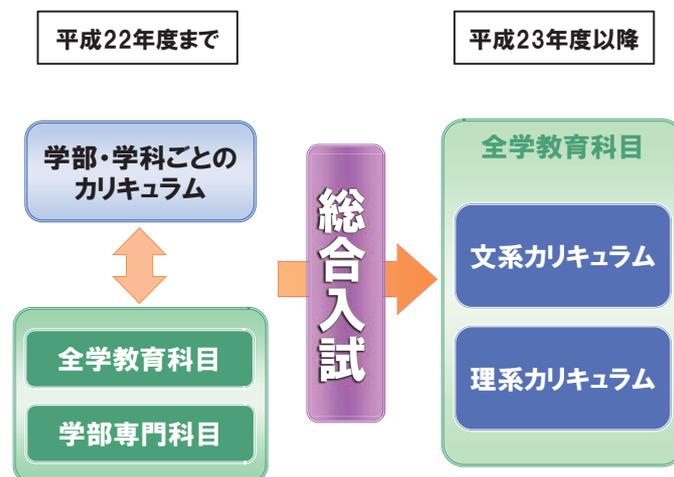


図1

単位の認定に関すること、3)進級に関すること、4)学籍の異動に関すること、5)学生の処分に関すること、6)学生生活に関すること、7)学部移行に関すること、8)学部移行に係る調査に関すること、等を扱い、これらの事案を審議するため、総合教育教務専門委員会(上記1~4の項目を扱う)、総合教育学生専門委員会(5~6の項目)、総合教育移行専門委員会(7~8の項目)が新たに設置されました。これらの委員会の構成メンバーは、各部局から推薦された教員や高等教育推進機構の教員などのほか、総合教育教務専門委員会と総合教育学生専門委員会にはクラス担任代表者も加わっています。

平成23年度以降の初年次教育は、全学教育部と総合教育部が両輪となって進めます。同時に、高等教育推進機構には、教育研究機能を持つ高等教育研究部と教育支援機能を持つ教育支援部が整備され、教育支援部には、自然科学実験を担当する「自然科学実験支援室」と、初年次学生の進路・修学相談や学習サポートなどの支援業務を担当するアカデミック・サポートセンターが置かれました。これら4つの部が連携して、初年次教育と学生支援を効率的に実践していくことになります。

3) クラス編成とクラス担任の役割

総合入試制度で入学した学生(定員:理系1,027名、文系100名)は、入学時には2年次以降の進級学部・学科が決定していません。一方、AO入試、学部別入試(前期日程)および後期日程の入試等で合格し、本学に入学する学生はすでに進級先が決定しています。理系の学生は、総合入試と学部別入試

で入学した学生を区別せず、合計37の基礎クラスを構成します。文系の学生は、合計15の基礎クラスのうち13が学部別入試で入学した学生、残りの2が総合入試で入学した学生のクラスとなります(図2)。

これに伴って、クラス担任の役割も変わります。従来、クラス担任が担当するのは、自身が所属する学部の学生のクラスでした。平成23年度からは、任されたクラスの大半は、自身が所属する学部に進級するとは限らない学生になります。

クラス担任だけでなく、本学の教員一人ひとりの今後の役割・責任を考える上で、この事実はよくご理解ください。初年次教育の善し悪しは、その後の大学の教育研究の推進・発展を下支えします。その意味でも、新入生のサポートの重要性を再認識していただくようお願いします。

クラス担任の役割は多岐にわたります。それらの任務を一人で抱え込む必要はありません。平成23年度からはクラス担任の皆様を支援する体制がさらに整備され、学生相談室、保健センターの専門家(専門医、カウンセラーなど)のほかにも、4月の上級生による履修相談会MANAVI、ピアサポート室の「学生によるなんでも相談」、アカデミック・サポートセンターによる進路・修学相談や学習サポートなど、さまざまな学生支援の仕組みが用意されています(図2)。

クラス担任は、専任としての所属学部以外に、総合教育部での役職を兼務していただきますので、総合教育部が中心となり、クラス運営、学生指導のノウハウについて支援させていただきます。クラス担

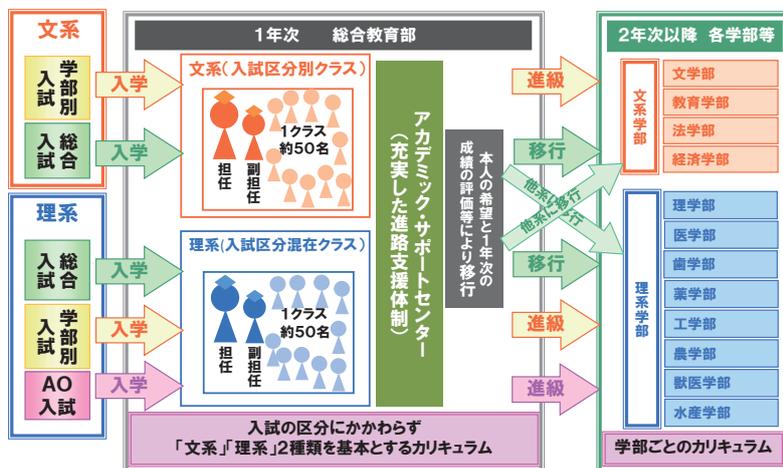


図2

任同士の情報交換の場として、クラス担任等連絡会を運営するほか、これら全ての情報を記載した「クラス担任マニュアル」を編集し、配布しています。必要に応じて、学生指導に大いに利用してください。(17 ページ参照)

総合教育部の役割～初年次学生のための「学部」としての機能

ここで、総合教育部の役割を具体的にみてみましょう。初年次の学生が進級要件を満たせない場合は、留年して翌年再度初年次をやってもらうこととなります。初年次の在籍期間は2年までと定められ、その間の休学期間等についても新たに定められました。初年次の学生が進級判定や学部・学科移行の最終判定は総合教育部が行います。これにより、総合教育部は、初年次学生約 2,600 人が所属する実質

的な「学部」としての機能を持つこととなります。

総合教育部は、3つの専門委員会、52の基礎クラスの担任・副担任、そしてなにより2,600名あまりの初年次学生からなる巨大組織です。4月1日より新入生を受け入れ実質的なスタートを切ります。

これまで半年間、高等教育推進機構ならびに学務部および各学部の教職員の多大なご支援のもと、出来る限りの想像力を持って想定される事案の対処法を検討し、規則整備等を進めてきましたが、学部・学科への移行をはじめ数多くの事案に関しては、ある意味、未体験ゾーンであることも事実です。今後、想定外の出来事も含めて、適切に対処していく所存です。皆様のご理解とご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

好調なスタートを切った総合入試

教育学研究院 教授、教育改革室 役員補佐・アドミッションセンター副センター長 小内 透

本年度から導入された総合入試の結果が出ました。志願倍率を見ると、募集定員100人の総合入試文系が4.6倍、募集人員1,027人の総合入試理系が2.8倍になりました。総合入試理系の各重点選抜群の倍率は、数学(定員130人)が2.5倍、物理(定員235人)が3.2倍、化学(定員235人)が3.0倍、生物(定員177人)が2.6倍、総合(定員250人)が2.4倍となっています。

総合入試文系は、第一段階選抜予告倍率をこえ(第一段階選抜は実施せず)、前年度および本年度の文系各学部の実績を大きく上回る、予想以上に高い志願倍率でした。旧7帝大の募集単位と比較しても、30人未満の小さな募集単位を除くと、東大・理科三類の5.7倍に次ぐ高倍率になっています。

総合入試理系全体の志願倍率は、前期日程の定員すべてを提供した理学部(前年度前期日程倍率2.5倍)、工学部(同2.6倍)、農学部(同2.1倍)、薬学部(同2.6倍)の前年度実績を上回っています。

志願倍率から見た限り、総合入試は好調なスタートを切ったといえます。受験科目の組み合わせやノーベル賞効果等、いろいろな要因が考えられますが、基本的に「未成熟な学部・学科選択によるミ

スマッチの解消」「学問分野の細分化・融合化への対応」「初年次教育における共通教育の充実」という総合入試導入の目的や意義が受験生や学校関係者・保護者に広く伝わり、支持された結果だと受けとめてよいと思います。

とくに関東地区の志願者(前期・後期合計)が昨年度より322人と大幅に増加しており、この地域の方々の支持が大きかったと推測されます。

入試全体としては、学部によって学部別入試の志願状況にばらつきがありますが、総合入試が好調だったこともあり、一般入試の合計で志願者数が昨年より327人増加し、9,990人となりました。

総合入試を中心とした新しい入試制度は、今回の結果だけで評価することはできません。入学後1年間の総合教育部での共通教育や学部・学科移行の結果、さらに学部での専門教育の成果をふまえて検討する必要があります。この点をふまえながら、今後も入試制度の検証を進めていく予定です。

FD ワークショップ「教室英語表現の活用法」を 工学部および獣医学研究科向けに実施

国際教育連携支援チームは、高等教育推進機構と共催で、昨年度、英語で授業を行う教員向けのサポートプログラムに取り組みました。

その一環として実施した「文学研究科向け英語での授業に関するFDプログラム」および「ライデン大学FDプログラム」をもとに、このたび「教室英語表現の活用法」と題したFDワークショップを工学部および獣医学研究科向けに実施しました。進行役（ファシリテーター）は、国際教育連携支援チームのプログラム・コーディネーターが担当しました。

工学部向けFDワークショップ

3月14日に第4回工学部FD『教室英語表現の活用法』が開催され、工学研究院および情報科学研究科から計23名の教員が参加しました。参加者には、『大学教員のための教室英語表現300』（アルク）が参考資料として配付されました。事例をもとに、英語で授業を行う際に起こりうる課題と具体的な対応策について、ペアワークと全体ディスカッションを通して活発な意見交換がされ、さまざまなアイデアが提案されました。（写真1）

また、実践的な少人数制のマイクロティーチング・ワークショップも実施されました。3月15日には3名、16日には2名の教員が参加して、平成21年7月に実施されたナイキスト教授（ワシントン大学教育開発研究センター・名誉センター長）によるワークショップの手法を取り入れて行われました。この機会に英語での授業に初めて挑戦した教員もあり、「自分のレッスンを客観的に見ることができ、他の教員との建設的な意見交換からたくさんのアイデアを得ることができて有益だった」などの感想がありました。（写真2）

獣医学研究科向けFDワークショップ

英語での授業を本格的に開始するための教員サポートとして、事前に『大学教員のための教室英語表現300』を獣医学研究科および人獣共通感染症リ

サーチセンターの全教員に配付しました。

3月17日に開催された平成22年度第4回獣医学研究科FDワークショップ『教室英語表現の活用法』には、全教員の半数以上にあたる計35名が参加しました。伊藤茂男研究科長の冒頭の挨拶で、来年度から大学院の授業は原則英語で実施することになる旨が伝えられ、当事者意識の高まった雰囲気の中で、「『来学期から英語での授業を担当してください』と言われたら準備万端ですか？」という質問で始まり、懸念事項を一つ一つ解決するために積極的なディスカッションが行われました。3月14日の工学部向けFDとほぼ同じ内容で、工学部で提案された対応策も紹介されました。（写真3）

まとめ

国際教育連携支援チームは、2年半のプロジェクトを終え、3月末をもって解散します。教職員サポートのために作成した資料や実施した活動については、本学ホームページに掲載しておりますので、今後の国際化推進にご活用いただければ幸いです。

「国際化加速の取組（ダブル・ディグリー、英語による授業のFD等）」
<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/e/wabun/index.html>

（国際本部国際連携課 国際教育連携支援チーム
佐羽内 喜久子）

写真1 工学部FDワークショップ



写真2 工学部マイクロティーチング・ワークショップ

写真3 獣医学研究科 FD ワークショップ



PFF Workshop 2011

We are pleased to announce the opening of the third workshop for graduate students who wish to improve their teaching and writing skills in English.

The workshop will be conducted by Dr. Linda von Hoene, Director of the Graduate Student Instructor Teaching and Resource Center, University of California, Berkeley (UCB), and Dir. Sabrina Soracco, Director of the Graduate Division Academic Services, UCB, and will be based on the workshop they practice at UCB.

This workshop will enable participants to strengthen their teaching skills to allow better expression of ideas in research writing, and provide a basis for effective teaching skills which is the foundation of a career in teaching.

Period:	July 27(Wed.)-29(Fri.), August 1(Mon.)-2(Tues.), 2011
Place:	Institute for the Advancement of Higher Education, HU
Program:	See the syllabus.
Language:	English
Cost:	None



Dr. Linda von Hoene



Dir. Sabrina Soracco

表1 Syllabus: Preparing Future Faculty

Course Title	Preparing Future Faculty: An Introduction to Teaching and Writing for Graduate Students
Instructors, Institutions	Eijun Senaha, Associate Professor, Graduate School of Letters, HU Toshiyuki Hosokawa, Professor, Institute for the Advancement of Higher Education, HU Atsushi Ando, Professor Emeritus, HU Linda von Hoene, Director, Graduate Student Instructor Teaching and Resource Center, UCB Sabrina Soracco, Director, Graduate Division Academic Services, UCB
Key Words	Teaching Assistant, Syllabi, Grading Rubrics, Academic Writing
Course Objectives	To enable graduate students of any discipline to obtain basic skills and knowledge to manage education and research through effective English communication skills as a foundation for those considering a career in teaching at the university level. This workshop will introduce teaching and writing skills by the renowned instructors from UC-Berkley and introduce their Preparing Future Faculty (PFF) program.
Course Goal	1. Obtain knowledge and skills in teaching as preparation for teaching at the university level. 2. Obtain knowledge and skills as a Teaching Assistant. 3. Obtain skills to write and edit proposals and essays for academic journals and job applications. 4. Obtain knowledge and skills for giving academic presentations, participating in discussions, and giving peer reviews in English. 5. Acquire the ability to explain the tasks of academic professions. 6. Obtain knowledge and skills as an international, academic professional.
Course Schedule	1. Opening: Keynote Speech and Introduction 2. Basics of Teaching 3. Basics of Academic Writing 4. Designing Course Syllabi and Learning Objectives 5. Writing and Submitting Conference Proposals 6. Submitting Articles to International Journals 7. Creating and Using Grading Rubrics 8. Teaching Large Courses 9. Writing Abstracts 10. Professional Standards and Ethics in Teaching 11. Editing and Revising Writing 12. Panel Discussions 13. Student Presentations 1 14. Student Presentations 2 15. Closing: Summary and Closing Address 16. Opening: Keynote Speech and Introduction
Homework	Preparation for oral presentations and essay writing. Your actual workload (in-class / at-home) will be approximately 90 hours before/during/after the course.
Grading System	Your grade for this course will be based on the following: 1. Class Contribution (33.3%): Attendance and active participation in each workshop. This includes participation in large- and small-group activities; teamwork and collegiality; and helping each other learn through peer feedback and scholarly exchange. 2. Course Work (33.3%): Completion of assignments between sessions and use of resources such as tutorial support and instructor office hours. 3. Final Project and Presentation (33.3%): Written and oral presentations to help you apply and synthesize what you have learned in the workshops. Details will be provided.
Textbooks	No textbook required. Handouts will be distributed.
Reading List	TA 実践ガイドブック / 小笠原・西森・瀬名波編著 : 玉川大学出版部, ISBN:4472403366
Websites	International Symposium on Professional Development in Higher Education 2009, HU & University of Tsukuba Workshop 2009: March 18-24, 2010, HU Workshop 2010: July 21-27, 2010, HU GSI Professional Standards and Ethics Online Course, UCB
Additional Information	TOEFL 500+ is advised. 30 participants (graduate students) and 10 observers (students, postdoctoral, faculty or staff) will be accepted for the workshop. Affiliation with Hokkaido University is not a prerequisite. Preliminary application for the workshop: Wednesday, June 1 ~ Monday, June 27, 2011. Online Application & information: http://ws.high.hokudai.ac.jp/ Participants will be chosen by lottery if the number exceeds the limit (30). * For the HU graduate students this is a credit course in all disciplines (Daigakuin Kyotsu Jugyo). If you want to take this as a credit course, you should register through the HU Registration System in April and also complete our online application in June. Contact us: ando@high.hokudai.ac.jp

理学院における GSI 制度の意義

理学研究院 教授 鈴木 久男

2010年10月7日、物理部門 GSI 研修会でカリフォルニア大学 Berkeley 校の GSI (Graduate Student Instructor) のリーダー (コンサルタント) Shannon さん (物理学専攻, 博士課程3年) の講演に立ち会いました。堂々とした分かりやすい説明, 観客の態度を見ながら説明を変えていく様, どれをとっても, 北大の大学院生の説明能力を遙かに凌駕しています。それは, おそらく GSI として4年以上の訓練の成果でしょう。私はそのとき GSI のあるべき方向性をはっきりと確認できたのです。

2010年以前には, 北大物理学科における演習のスタイルは, 現在の教員が学生だったときとほぼ同じでした。まず教員が比較的難しい問題を多数の学生に提示し, それを解けた学生が黒板で発表する形式で, 学生一人あたり半期に平均2,3問を発表します。これは優秀な学生には非常に良いシステムで, 教員の間では, 学生の頃演習が役立ったという声が多く聞かれます。これは一部のエリートに役立つ授業や演習で, それをよしとした一部の学生がその後教員となって専門教育が循環してきたのです。

しかしここ数十年で, 講義の形態を含めて, 教育のあり方がはっきりと変わってきました。すなわち, 教育とはクラスにおいて, その教科を理解できた人数を最大化する作業であって, ごく一部のための授業ではないのです。こうした視点に立つと, エリート時代の演習には根本的な欠点があります。多くの

学生は演習で扱う難しい問題はおろか, 易しい問題すら解けないのです。学生にとって, 難しい問題は理解を遙かに超えており, 授業では理解せずに解答の記憶ですませようとしています。こうした演習の仕方は, 米国ではすでに数十年前から見直され, 変更されてきました。しかも米国においてはその演習を担っているのは大学院生 GSI なのです。

それでは大学院生にとって GSI とはどのようなものでしょうか? まずは生計の助けになります。米国では GSI をやるだけで月収十数万円になり, 授業料免除もあって, 食べていけます。

また職業教育としての面も見逃せません。教えるためには, その教科をより深く理解すること, しかも分かりやすく教える技術やコミュニケーション能力が求められます。また公正な評価能力も必要です。こうした能力は, 将来教科の教員・研究者となって役立つだけでなく, 企業などでも役立つはずで。また, 学生に教えて, 理解できて良い成績を取ったときの喜びを味わうこともできます。北大生としてフロンティア精神を養うには, 自他を含めた評価能力, 企画力, 説明能力などが必要で, GSI の職



写真1 Shannon さんの講演

務はこれらを養うのに役立ちます。大学院生もほとんどは企業に就職するので、学科の専門とは別に、普遍的資質を養う教育を行うことも重要です。

物理学科では、これら演習の改革と大学院生も加わったトータルな教育を目指して、現在7つある演習の授業すべてをGSIの指導に切り替えることに決定し、2010年4月より実施しています。教員の中にも賛否両論がありました。それぞれの授業をサポートする演習となるので、失敗しても今よりも悪くなることはないという判断もありました。

教育においても蓄積が重要です。研究と同様に現在までに知られているノウハウを習得しその上に独創性を発揮させるのが有効です。実際、Shannonさんが教えてくれた、GSIが指導するグループ討論中心の演習のスタイルは、日本の物理教育では斬新なものです。学生にとって、教員は何でも知っている雲の上の存在と思われがちですが、大学院生GSIは数年後の自分たちの目標ともなるのです。

実際実施してみると、「質問がしやすい」「わかりにくいところがどこかわかってくれる」など、学生(GSI)の方が良いという者が40%に上り、教員による演習の方がよいという学生は15%、残りはどちらでも良いという意見です。従来の演習で落ちこぼれて再履修した学生のほとんどが「もっと早く院生による演習にしてほしかった。」と言い、しか

も優秀な成績を修めました。教育はサイエンスとは違って、全員に有効な教育法はありませんが、物理学科の演習の改革は、より多くの学生のためになる教育システムになったと思います。

これらの成果のほぼすべては、GSIとなった学生達の努力のたまものです。授業担当教員との打ち合わせ、相互参観、学生の正答率に合わせた問題の作成、毎回の小テストの実施、GSI内でのミーティング、GSI研修会など、ほぼすべてを担っています。教員の責任は、必要な教材をそろえることと、GSIが作成した毎回の小テストや発表、期末テストなどの数値化されたデータに基づく成績付けのチェックだけです。特に初年度のGSIにとっては大変な仕事だったでしょう。まだ問題も多く改善点もありますが、すでに現状でも今までの演習よりも良いと確信しています。これから米国同様にさらにノウハウの蓄積が進み、演習は改良されていくでしょう。

1つ重要なのは、GSIの活用は教員の負担を減少させるという視点です。物理学科では、空いた教員負担を活用して新たな専門科目を設定することができるようになりました。さらに、現在の7科目だけでなく、主要11科目すべてにGSIによる演習をつけることに決定しました。このようにGSIの活用は、教員、大学院生、学部生すべてに有益なものとなるのです。

2010年度理学院 GSI 活動報告と今後の課題

2010年度4月より理学部物理学科においてGraduate Student Instructor (GSI) 制度が導入されました。これは、大学院生GSIが物理学科における演習科目を担当し、演習の計画・運営から成績評価までを行う制度です。2010年度には前期2科目、後期5科目がGSIによって運営されました。

2010年度のGSI制度では、次の2つの目標が大きな柱となっています。1つは学部生の演習問題に対する習熟度の底上げ、もう1つは発表及び討論を経験できる場を提供することです。これらは演習として至極当然な目的ですが、この点を院生各人が意識した上で演習を運営していくことが初年度には

理学院宇宙理学専攻 博士後期課程3年 菊池 右馬
特に重要であったと認識しています。

上記2つの目的に基づいて、各演習科目の担当GSIがそれぞれ違った運営形式や成績評価法を計画し、それに沿って演習が運営されました。2011年3月現在、7科目全てが終了し、担当のGSIによって成績評価が行われています。初年度GSI制度による演習科目の運営は大きな問題もなく終了し、十分及第点に達していると確信しています。

GSI制度は、院生にとっては大学院在学中に経験することが少ない教育の現場に触れる貴重な機会となります。また、学部生にとっても、年齢的に近いGSIが演習を担当することで質問しやすい環境が提

供され、意欲的に演習に参加しやすくなります。このような視点から、GSI 制度が確立し、効果的に実施されれば、院生、学部生双方にとってメリットが大きいと思います。

その一方で、GSI 制度には未だ多くの問題が残っています。ここでは特に来年度以降解決されるべき、2つの問題について触れます。

1つ目の問題は、GSI を担当する院生の負担をいかに軽減するかです。初年度の GSI 制度では、演習問題やその解答の準備、演習の計画と運営、成績評価などあらゆる面で院生が主導的役割を果たし、その負担は他の TA 制度に比してかなり大きくなりました。特に初年度は演習問題の蓄積がないため、その作成の負担が大きく、また演習の運営方針や成績評価基準に関して院生が考えなければならない部分が多くありました。このような状況は演習を担当している院生の個人の研究時間を圧迫し、研究との両立が難しくなります。GSI 制度として、院生の負担軽減の方策を用意する必要があると思います。

2つ目の問題は、演習の目的・方針をいかに明確に共有するかです。GSI 制度は演習を院生が主導的に行うので、院生は学部生に目線が近い分、彼らの視点に立った指導できるという利点がある一方で、院生には教員と同程度の知識レベルが備わっている訳ではなく、物理やその他分野に対する見識も狭いという難点もあります。そのため、院生が行う演習に教員と同様の教育効果もしくは教育目的を求める

ことは困難です。また、現状の GSI 制度では、各年度で担当する院生が入れ替わるため、担当者の変動に左右されず、かつ院生が担当するにふさわしい教育目的や教育方針を設定することが、GSI 制度を安定的に運営する上で必須といえます。

これらの問題を解決するには、GSI と教員の綿密な連携が重要です。2つ目の問題で述べた通り、演習を担当する院生は年度ごとに入れ替わるため、常勤の教員が GSI 制度をきちんと監督し、その運営方針を示すことが安定的な運営のために必要です。

また、運営方針や成績評価基準等を明文化したガイドラインが作成されることも重要です。これは1つ目の問題の解決のためにも重要で、そのようなガイドラインを作成する上でも継続的に GSI 制度を評価できる教員の役割は大きいと思います。

演習という一連の科目群は本来、北大物理教室における教育の一環として行われています。そのため、演習科目における教育目的やその方針を、教員と GSI 担当の院生、両者の協議の上で決定することが望まれます。GSI 制度を通して、物理教室における演習科目の教育目的がより明確化・透明化され、それが学部生の教育に還元されることを今後期待したいと思います。

最後に、初年度に GSI として演習を担当していただいた院生諸氏（浅賀、井坂、石倉、泉田、大谷、金川、日下、栗原、今野、佐藤、成田、布施、星名、若山、王）に深く感謝します。

写真1 GSI による演習の様子

全学教育 GENERAL EDUCATION & **総合教育** FIRST YEAR EDUCATION

学務委員会等報告

第3回学務委員会

平成23年3月2日(水)に第3回学務委員会が開催され、以下の議題について話し合いました。

議題

1. 北海道大学学部におけるGPA制度の取扱いに関する要項の一部を改正する要項(案)
2. 『「秀」評価, GPA制度, 自由設計科目制度及び履修登録単位数の上限設定の実施について(Q&A)(案)』
3. 初年次学生の既修得単位認定要領(案)
4. 第2年次進級後の学部専門科目の取り扱い
5. 平成23年度移行手順(案)等
6. 平成23年度全学教育に係るTAの採用
7. アカデミック・サポートセンターの体制(案)
8. 学部における相談担当者の配置(案)
9. 北海道大学鈴木章科学奨励賞-自然科学実験-の設置

報告事項

1. 全学教育科目実行教育課程表の変更
2. 「学部要望科目」一覧の変更
3. 他系移行学生にかかる授業科目の読み替え
4. 自然科学実験再履修の取り扱い
5. 国際交流科目の取り扱い
6. 留学生の外国語科目の履修要件等
7. 平成23年度全学教育科目の開講計画変更
8. 平成23年度授業参観の実施
9. 平成22年度全学教育委員会の検討事項(報告)
10. 平成22年度第2学期履修者数
11. 新入生オリエンテーション・総合教育部ガイダンス
12. クラス担任幹事会等
13. 平成22年度英語IIオンライン授業の報告
14. 第1年次学生の証明書等にかかる証明者
15. 総合教育体制実施に向けた今後の検討事項

「秀」評価, GPA制度, 自由設計科目制度及び履修登録単位数の上限設定の実施について(Q&A)

平成23年度に新設される総合科目「学問の世界」はGPAの対象外とし、教職科目および国際交流科目は第1年次においてはGPAの対象外とすること、文系基礎科目は抽選による履修調整を行わないこと、「学問の世界」「インターンシップA・B」「外国語科目(2つ目の初習外国語は除く)」は自由設計科目の対象外とすることなどが了承されました。

初年次学生の既修得単位認定要領

平成23年度より、本学、他の大学もしくは短期大学を卒業または中途退学した初年次学生の既修得単位の認定は、総合教育部において行います。認定できる単位数は一律に20単位以内となります。

第2年次進級後の学部専門科目の取り扱い

平成23年度以降の学部専門科目の適用年次について、原則「入学年度に関わらず2年次進級時に適用」、ただし経済学部、医学部医学科・保健学科に関しては「入学時に適用する」ことになりました。

平成23年度移行手順

- 平成23年度学部移行手順は以下の通りです。
- 9月28日～ 第1回志望調査・結果発表
 - 2月28・29日 進級判定・振分定員確定
 - 3月1日～ 第2回志望調査・結果発表
 - 3月6日～ 第1次志望登録
 - 3月9日 第1次振り分け結果表示
 - 3月9日～ 第3回志望調査・結果発表
 - 3月13日～ 第2次志望登録
 - 3月16日 第2次振り分け結果表示
 - 3月16日～ 補充振り分け登録・結果発表
 - 3月22日 各学部へ振り分け結果表示

平成 23 年度の TA の採用

平成 23 年度全学教育 TA について、各部局から推薦のあった候補者の採用が了承されました。TA の採用人数は、のべ 1,151 (前年度は 1,023) 人、予算総額は約 4,630 (前年度は 4,300) 万円です。

アカデミック・サポートセンターの体制

平成 23 年度には総合入試による新入生が初めて入学し、学生の進路選択等の支援体制としてアカデミック・サポートセンターの役割がますます重要になるところから、さらに強固なサポート体制を構築するため、以下の措置が了承されました。

1. 進路相談 (学部等の選択等の総合的アドバイス) を担当するアカデミック・アドバイザー (専任教員の兼務) 3 名を設ける。
2. アカデミック・ナビゲーター機能 (学部・学問分野のミスマッチの解消, 各種学生支援機関との連携, 学生支援の充実), アカデミック・インストラクター機能 (学力・学習意欲の向上, 教員へのフィードバック, 授業内容の改善) およびアカデミック・アナリスト機能 (総合入試制度の検証, 制度の改善, 入試広報への活用) を担当する特定専門職員 6 名を設ける。
3. 上記の担当以外にも、クラス担任・授業担当教員, ピア・サポート室, 学生相談室, 保健センター, 学部相談員等との有機的な連携のもとに、学生への支援を実施する。

学部における相談担当者の配置

平成 23 年度以降、初年次学生を支援するため、進級する学部及び進級を考えている学部の特化した相談に対応する学部相談員 (専任教員の兼務) を各学部に複数配置し、その名簿は総合教育部便覧に掲載します。

鈴木章科学奨励賞－自然科学実験－の設置

平成 23 年度から、初年次の全学教育科目「自然科学実験」で優秀な成績を修めた学生 (毎年 6 名程度) に対する表彰制度を新設します。この制度はノーベル化学賞を受賞された鈴木名誉教授の名前を冠して「北海道大学鈴木章科学奨励賞－自然科学実験－」とし、高等教育推進機構長による表彰となります。

「学部要望科目」一覧の変更

昨年 9 月 2 日開催の教務委員会です承された「学部要望科目」の一部変更が報告されました。

他系移行学生にかかる授業科目の読み替え

平成 23 年度以降の全学教育科目実行教育課程表は文系・理系用に統一されますが、他系移行 (文系から理系, 理系から文系) を志望する学生については、以下の授業科目の読み替え, 移行点への算入を可能とし、他系に進級後は卒業要件科目となります。

1. 文系の学生が理系に移行を希望した場合、
「基礎自然科学実験」は「自然科学実験」に、
2. 理系の学生が文系に移行を希望した場合、
「自然科学実験」は「基礎自然科学実験」に、
「物理学 I, II」は「基礎物理学 I, II」に、
読み替え

自然科学実験再履修の取り扱い

平成 23 年度からの自然科学実験の再履修について「後期に再履修によって取得した自然科学実験の単位は移行点算出の対象とならない」ことになりました。自然科学実験の履修機会は通常 1 学期または 2 学期の 1 回のみで、2 学期に履修する学生の不利を解消するための措置です。

国際交流科目の取り扱い

平成 23 年度以降、初年次学生には全学教育科目のほかに、例外的措置として国際交流科目の履修を許可し、上限設定単位数には含まれない科目とします。

留学生の外国語科目の履修要件等

留学生の外国語科目の履修要件等については、進学先の学部ごとの履修要件が規定されます。

平成 23 年度全学教育科目の開講計画変更

前回の学務委員会以降の、平成 23 年度全学教育科目開講計画の変更 (講義題目及び担当教員の決定, 担当教員の変更, 部局別の授業開講状況, 非常勤採用コマ数など) が報告されました。開講コマ数合計は、2,013 (前年度は 1,949) コマ, うち非常勤講師担当は 394 (前年度は 401) コマとなりました。

平成 23 年度授業参観

平成 22 年度に初めて実施した授業参観について、参加者が 1 学期 2 名、2 学期 5 名と極めて少なかったことにをふまえて、問題点と改善策、および平成 23 年度の授業参観対象候補科目が報告されました。

平成 22 年度全学教育委員会の検討事項

①中期目標・中期計画の実施に伴う検討事項（総合入試導入に伴う全学教育科目の充実）、②単位の実質化・授業改善に関すること、③全学教育支援体制の強化に関すること、④新教育課程の実施に伴う教務情報システム・教務事務体制に係る改善事項など、平成 22 年度に全学教育委員会等で検討した全 13 項目の改善状況が報告されました。

平成 22 年度第 2 学期履修者数

履修取消者数及び集中講義の履修者数等を反映した平成 22 年度第 2 学期の最終的な履修者数が報告されました。(15 ページ参照)

新入生オリエンテーション・総合教育部ガイダンス

4 月 7 日午前、52 クラスでクラス担任による新入生オリエンテーション（クラス担任紹介、各種提出書類の回収、学生生活における注意事項等）と全体ガイダンス（総合教育部の説明、安全教育等）、午後は総合入試入学者向け学部移行ガイダンスと学部別入試入学者向け学部ガイダンスを行います。

クラス担任幹事会等

平成 23 年度クラス担任幹事会が 3 月 8 日、クラス担任等連絡会が 3 月 16 日と 9 月 22 日、メンタルヘルス講習会が 3 月 18 日に開催されます。

平成 22 年度英語 II オンライン授業

外国語教育センター英語 CALL 実施委員会がとりまとめた平成 22 年度の英語 II オンライン授業の実施状況等が報告されました。

第 1 年次学生の証明書等にかかる証明者

平成 23 年度以降、第 1 年次学生の在学証明書等に係る証明者は高等教育推進機構長となります。

第 2 回全学教育専門委員会

平成 23 年 2 月 23 日（水）に第 2 回全学教育専門委員会が開催され、以下の報告がありました。

成績評価・授業評価結果検討専門部会からの報告

平成 21 年度第 2 学期の成績評価結果に片寄りがあると思われる 15 科目の担当教員に事情を照会し、10 件の回答が寄せられました。

平成 22 年度第 1 学期については、平均 GPA1.90 未満及び 2.90 以上の 13 科目の担当教員に事情を照会しました。

入学後の修学特別措置

身体に障害のある出願者 17 名の希望する入学後の修学特別措置についての回答内容と、重度の聴覚障害をもつ学生へのサポート体制構築のためのノートテイク講座の実施要領が報告されました。

平成 23 年度第 1 学期の履修調整

外国語演習（外国特別演習を除く）については、今回から外国語教育センター以外の教員の担当であっても、抽選の時点で履修者が 3 名以下の場合には開講取消となります。

平成 23 年度第 1 学期外国語演習（講義題目：海外短期語学研修）申請要領等

夏休み期間に実施される 2 週間以上の短期語学研修の申請要領等が報告されました。

入学後に履修する外国語科目の履修案内

昨年 8 月 2 日開催の全学教育委員会で初習外国語の選択方法の変更が了承されたのに基づき、入学手続き書類に同封する初習外国語科目の履修案内（申請用紙、科目紹介、学部要望科目、2 つ目の初習外国語の案内を含む）が報告されました。

(佐々木亨 文学研究科 教授・副機構長、
山口淳二 理学研究院 教授・副機構長)

平成22/21年度(第1学期)全学教育科目履修者数対比表(2011.2.9最終)

区分	授業科目	22年度1学期			21年度1学期			22/21年度比較	
		クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	履修者の増減	前年比%
	一般教育演習(フレッシュマンゼミナ)	84	1,625	19.35	84	1,598	19.02	27	101.7%
	(集中・論文指導除く)小計	17	330	19.41	19	350	18.42	▲20	94.3%
	(集中:フィールド体験)小計	11	259	23.55	12	289	24.08	▲30	89.6%
	(論文指導)小計	56	1,036	18.50	53	959	18.09	77	108.0%
総合科目	環境と人間	16	1,033	64.56	15	1,027	68.47	6	100.6%
	健康と社会	10	1,875	187.50	9	1,863	207.00	12	100.6%
	人間と文化	5	429	85.80	6	421	70.17	8	101.9%
	人間と文化(集中)	1	14	14.00	1	18	18.00	▲4	77.8%
	特別講義	2	120	60.00	2	110	55.00	10	109.1%
	総合科目 小計	34	3,471	102.09	33	3,439	104.21	32	100.9%
主題別科目	思索と言語	10	1,229	122.90	7	809	115.57	420	151.9%
	思索と言語(論文指導)	3	64	21.33	5	104	20.80	▲40	61.5%
	歴史の視座	7	875	125.00	12	985	82.08	▲110	88.8%
	歴史の視座(論文指導)	5	91	18.20	3	92	30.67	▲1	98.9%
	芸術と文学	12	795	66.25	13	865	66.54	▲70	91.9%
	芸術と文学(集中)	2	136	68.00	2	140	70.00	▲4	97.1%
	芸術と文学(論文指導)	6	142	23.67	6	121	20.17	21	117.4%
	社会の認識	22	2,642	120.09	19	2,008	105.68	634	131.6%
	社会の認識(論文指導)	8	137	17.13	10	165	16.50	▲28	83.0%
	科学・技術の世界	20	2,147	107.35	17	1,518	89.29	629	141.4%
	科学・技術の世界(論文指導)	3	61	20.33	3	64	21.33	▲3	95.3%
	主題別科目 小計	98	8,319	84.89	97	6,871	70.84	1,448	121.1%
(集中・論文指導除く)小計	71	7,688	108.28	68	6,185	90.96	1,503	124.3%	
(集中)小計	2	136	68.00	2	140	70.00	▲4	97.1%	
(論文指導)小計	25	495	19.80	27	546	20.22	▲51	90.7%	
共通科目	体育学A(実技・1単位)	53	1,960	36.98	53	1,968	37.13	▲8	99.6%
	体育学B(講義・2単位)	1	86	86.00	1	89	89.00	▲3	96.6%
	情報学	19	2,615	137.63	19	2,566	135.05	49	101.9%
	統計学	11	847	77.00	11	830	75.45	17	102.0%
	インターナショナル	2	125	62.50	2	91	45.50	34	137.4%
	共通科目 小計	86	5,633	65.50	86	5,544	64.47	89	101.6%
外国語を除く教養科目 合計		302	19,048	63.07	300	17,452	58.17	1,596	109.1%
うち論文指導(主題別・一般教育演習)小計		81	1,531	18.90	80	1,505	18.81	26	101.7%
外国語科目	英語	140	5,321	38.01	138	5,308	38.46	13	100.2%
	ドイツ語	29	925	31.90	32	1,053	32.91	▲128	87.8%
	フランス語	14	467	33.36	15	490	32.67	▲23	95.3%
	ロシア語	5	87	17.40	5	73	14.60	14	119.2%
	スペイン語	6	242	40.33	6	259	43.17	▲17	93.4%
	中国語	23	819	35.61	26	722	27.77	97	113.4%
	韓国語	5	191	38.20	5	166	33.20	25	115.1%
	外国語科目 小計	222	8,052	36.27	227	8,071	35.56	▲19	99.8%
外国語演習	英語演習	91	1,593	17.51	78	1,293	16.58	300	123.2%
	英語演習(集中)	1	6	6.00	—	—	—	—	—
	ドイツ語演習	9	193	21.44	14	195	13.93	▲2	99.0%
	フランス語演習	15	217	14.47	13	227	17.46	▲10	95.6%
	ロシア語演習	6	63	10.50	4	22	5.50	41	286.4%
	スペイン語演習	6	80	13.33	6	88	14.67	▲8	90.9%
	中国語演習	16	228	14.25	16	206	12.88	22	110.7%
	韓国語演習	6	84	14.00	6	79	13.17	5	106.3%
	外国語特別演習	11	157	14.27	11	158	14.36	▲1	99.4%
	外国語演習 小計	161	2,621	16.28	148	2,268	15.32	353	115.6%
外国語 合計		383	10,673	27.87	375	10,339	27.57	334	103.2%
基礎科目	人文科学の基礎	5	697	139.40	5	669	133.80	28	104.2%
	社会科学の基礎	5	706	141.20	5	709	141.80	▲3	99.6%
	文系基礎科目 小計	10	1,403	140.30	10	1,378	137.80	25	101.8%
	線形代数学	30	1,856	61.87	30	1,884	62.80	▲28	98.5%
	微分積分学	31	1,782	57.48	31	1,774	57.23	8	100.5%
	数学概論	4	171	42.75	4	203	50.75	▲32	84.2%
	数学 小計	65	3,809	58.60	65	3,861	59.40	▲52	98.7%
	基礎物理学・物理学	33	1,842	55.82	35	1,835	52.43	7	100.4%
	基礎化学・化学	31	1,889	60.94	32	1,965	61.41	▲76	96.1%
	基礎生物学・生物学	19	1,390	73.16	19	1,405	73.95	▲15	98.9%
	基礎地学	7	570	81.43	7	626	89.43	▲56	91.1%
	理科 小計	90	5,691	63.23	93	5,831	62.70	▲140	97.6%
	基礎自然科学実験	1	15	15.00	1	16	16.00	▲1	93.8%
	自然科学実験	18	909	50.50	18	936	52.00	▲27	97.1%
	基礎実験(旧カリ:1単位)	3	3	1.00	4	6	1.50	▲3	50.0%
実験 小計	22	927	42.14	23	958	41.65	▲31	96.8%	
基礎科目 合計		187	11,830	63.26	191	12,028	62.97	▲198	98.4%
日本語・日本事情		4	36	9.00	4	38	9.50	▲2	94.7%
全学教育科目 1学期合計		876	41,587	47.47	870	39,857	45.81	1,730	104.3%

各部署の授業担当状況

非	外(旧言語)		地球研		低温研		電子研	遺制研	触媒研	スラブ研	情基	留センタ	高等	創成	博物館	北方	公共	先端研	観光	アイス	サステナ	計						
	専	非	専	非	専	非	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	外	非	総計			
			5		1		1		2						3	3	1				1		29	0	0	29		
								1												1			17	0	0	17		
	1									1	1	1										12	0	0	12			
							理より提出						3									3	0	0	3			
			2		1	1	1	1	1	1	1	2	2		1	9						47	0	2	49			
	4		2		2		2	1	1	1	2	4			2	2	1		3			81	0	2	83			
							2				3	1				1		理より提出				28	0	2	30			
						うち1	は理より提出					1										3	0	0	3			
0	5	0	0	9	0	4	1	6	3	3	2	5	7	9	0	6	0	15	2	1	0	4	0	1	220	0	6	226

1) 履修者3名以下で開講中止となった一般教育演習(フレッシュセミナー)8科目除く。

外(旧言語)	地球研	低温研	電子研	遺制研	触媒研	スラブ研	情基	留センタ	高等	創成	博物館	北方	公共	先端研	観光	アイス	サステナ	計	
86	66	56	47	44	33	18	12	15	8	8	9	42	19	33	4	1	1	1863	
13	546	106	7	13	4	5	2	21	16	13	1	8	15	5	6	5	0	1561	
1.15	8.27	1.89	0.15	0.30	0.12	0.28	0.17	1.40	2.00	1.63	0.13	0.89	0.36	0.26	0.18	1.25	0.00	1.00	0.84
13	762	106	8	13	4	5	2	21	16	13	3	8	15	5	6	5	0	1965	
0	216	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	404.0	
00%	28.35%	0.00%	12.50%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	66.67%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	20.56%	

トップ総合センター, 保健管理センター分は医学部に算入。機器分析センター分は薬学部に算入。量子集積エレクトロニクス研究センター, エネルギー変換マテリアル研究センター分は工学部に算入。

外国語科目(表2)10コマの開講責任を負う。

助教以上の教員13名程度につき1コマを提供することとしている。またその内訳については「一般教育演習」を8割, 「外国語演習」を2割とする。

を含む)

各部署の授業担当状況

非	外(旧言語)			地球研		低温研		電子研	遺制研	触媒研	スラブ研	情基	アイソ	国際本部	高等	創成	博物館		北方	公共	先端研		観光	アイヌ	サステナ	計				
	専	外	非	専	非	専	非	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	非	専	専	専	非	専	専	専	専	専	外	非	総計
																								2			20	0	0	20
																											4	0	0	4
																											16	0	0	16
																											7	0	0	7
																											16	0	6	22
																											10	0	0	10
																											34	0	0	34
																											17	0	0	17
																											30	0	0	30
																											4	0	0	4
																											2	0	0	2
													1														14	0	6	20
	13							1				2															50	0	0	50
																											5	0	0	5
																											5	0	0	5
								2																			87	0	33	120
								2																			60	0	0	60
								3			2																61	0	0	61
								1	1																		39	0	0	39
																											11	0	0	11
																											9	0	0	9
0	23	0	0	27	0	1	0	9	1	2	0	3	0	9	0	3	0	0	0	0	2	7	0	1	2	0	501	0	45	546

注)「部局経費負担による非常勤」として、文学部の専任のコマに4コマ(社会の認識3, 歴史の視座1), 経済学部の専任のコマに2コマ(統計学2), 理学部(創成含む)の専任のコマに13コマ(数学3, 物理4, 化学6), 薬学部の専任のコマに1コマ(化学1)を含む。

非	外(旧言語)			地球研		低温研		電子研	遺制研	触媒研	スラブ研	情基	アイソ	国際本部	高等	創成	博物館		北方	公共	先端研		観光	アイヌ	サステナ	計					
	専	外	非	専	非	専	非	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	非	専	専	専	非	専	専	専	専	専	外	非	総計	
												10			2													79	0	22	101
																1												28	0	50	78
																2												2	0	0	2
	127	58	76																									127	58	76	261
	77		16																									77	0	16	93
	40		4																									40	0	4	44
	15		5																									15	0	5	20
	13	2	9																									13	2	9	24
	4	6	25									2																43	6	25	74
	7		13																									7	0	13	20
	47	27	19																									47	27	19	93
	4	1																										4	14	0	18
	7	11	1																									7	11	1	19
	8		2																									8	0	2	10
	4	5																										4	5	0	9
	18	8										1																19	8	0	27
	2		7																									2	0	7	9
	8		11																									8	0	11	19
																												8	0	0	8
																												8	0	0	8
																												66	0	10	76
																												70	0	16	86
																												56	0	10	66
																												18	0	0	18
0	418	131	188	68	0	2	0	0	0	0	0	(13)	0	0	4	1	2	0	0	0	0	4	0	0	0	0	756	131	296	1183	
	261.25			42.5		1.25		0	0	0	0	8.125	0	0	2.5	0.63	1.25	0	0	0	2.5	0	0	0	0	0				472.5	

注)「部局経費負担による非常勤」として、理学部の専任のコマに10コマ(物理10), 外国語教育センターの専任のコマに18コマ(英3, 独5, 仏2, 西5, 西演3)「総長協議(北京ワイス所長就任分)による非常勤」として、外国語教育センターの専任のコマに4コマ(中国語4)を含む。
外国語教育センターから履修者3名以下で開講中止となった外国語演習13(専2, 外6, 非5)を除く。

外(旧言語)	地球研	低温研	電子研	遺制研	触媒研	スラブ研	情基	アイソ	国際本部	高等	創成	博物館	北方	公共	先端研	観光	アイヌ	サステナ	計
(54)							(2)		-	-									177
284									9	4									
5.26									-	-									

注)開講コマ数は 1) 教育学部は「健康と社会」分を含む。2) 理学部は地球環境科学研究院, 創成研究機構, 先端生命科学研究院開講分を含む。
 3) 配当教員数の括弧書きの部分については, 関係部局と協議して検討中。

外(旧言語)	地球研	低温研	電子研	遺制研	触媒研	スラブ研	情基	アイソ	国際本部	高等	創成	博物館	北方	公共	先端研	観光	アイヌ	サステナ	計
1			3	9	1	2	16					2				1	2		77

る各部署の授業担当状況

外 (旧言語) 専 外 非	地球研		低温研		電子研	進制研	触媒研	スチア研	情基	アイソ	国際本部	高等	創成	博物館	北方	公共	先端研	観光	アイソ	サステナ	計							
	専	非	専	非	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	専	外	非	総計			
	4		1		1		2							3	3	1	1			1		30	0	0	30			
						1				1												16	0	0	16			
1								1	1		1	1							1			10	0	0	10			
												3										3	0	0	3			
	2		1	1				1				2		1	10							45	0	4	49			
4	2		2		2	1	2		1		1	5		2	2	1			1			78	0	1	79			
																						22	0	3	25			
					1						5				1		1					8	0	0	8			
5	0	0	8	0	4	1	4	2	4	2	2	1	7	11	0	0	0	16	2	2	0	1	1	1	212	0	8	220

1) 履修者3名以下で開講中止となった一般教育演習(フレッシュマンセミナー)8科目除く。

外 (旧言語)	地球研	低温研	電子研	進制研	触媒研	スチア研	情基	アイソ	国際本部	高等	創成	博物館	北方	公共	先端研	観光	アイソ	サステナ	計			
67	55	46	48	30	19	12	14	2	10	9	2	9	44	20	32	4	1	1	1854			
555	103	7	13	3	6	2	18	1	16	15	2	8	16	4	13	2	3	1	1548			
8.28	1.87	0.15	0.27	0.10	0.32	0.17	1.29	0.50	1.60	1.67	1.00	0.89	0.36	0.20	0.41	0.50	3.00	1.00	0.83			
765	103	8	13	3	6	2	18	1	16	15	4	8	16	4	13	2	3	1	1949			
210	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	401.0			
27.45%	0.00%	12.50%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	50.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	20.57%			

保健科学研究所, 保健管理センター分は医学部に算入。量子集積エレクトロニクス研究センター分は工学部に算入。

目(表2)10コマの開講責任を負う。

の教員13名程度につき1コマを提供することとしている。またその内訳については「一般教育演習」を8割, 「外国語演習」を2割とする。

長協議分4コマを含む)

長協議分4コマを含む)

平成22/21年度(第2学期)全学教育科目履修者数対比表(2011.2.9最終)

区分	授業科目	22年度2学期			21年度2学期			22/21年度比較	
		クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	履修者の増減	前年比%
総合科目	一般教育演習(フレッシュマンセミナー)	44	929	21.11	48	884	18.42	45	105.1%
	(集中・論文指導除く)小計	18	370	20.56	16	292	18.25	78	126.7%
	(集中:フィールド体験)小計	4	135	33.75	3	108	36.00	27	125.0%
	(論文指導)小計	22	424	19.27	29	484	16.69	▲60	87.6%
	総合科目 小計	25	2,490	99.60	28	2,414	86.21	76	103.1%
主題別科目	環境と人間	14	748	53.43	14	768	54.86	▲20	97.4%
	健康と社会	6	1,222	203.67	8	1,111	138.88	111	110.0%
	人間と文化	4	203	50.75	4	323	80.75	▲120	62.8%
	人間と文化(集中)	-	-	-	1	10	10.00	-	-
	特別講義	1	317	317.00	1	202	202.00	115	156.9%
	総合科目 小計	25	2,490	99.60	28	2,414	86.21	76	103.1%
	思索と言語	10	1,225	122.50	11	1,210	110.00	15	101.2%
	思索と言語(論文指導)	1	34	34.00	3	55	18.33	▲21	61.8%
	歴史の視座	8	694	86.75	5	1,085	217.00	▲391	64.0%
	歴史の視座(論文指導)	3	34	11.33	3	54	18.00	▲20	63.0%
	芸術と文学	8	1,311	163.88	7	784	112.00	527	167.2%
芸術と文学(論文指導)	4	92	23.00	1	10	10.00	82	920.0%	
社会の認識	12	1,893	157.75	14	1,926	137.57	▲33	98.3%	
社会の認識(論文指導)	9	142	15.78	6	96	16.00	46	147.9%	
科学・技術の世界	10	1,312	131.20	14	1,266	90.43	46	103.6%	
科学・技術の世界(論文指導)	1	12	12.00	-	-	-	-	-	
主題別科目 小計	66	6,749	102.26	64	6,486	101.34	263	104.1%	
(集中・論文指導除く)小計	48	6,435	134.06	51	6,271	122.96	164	102.6%	
(論文指導)小計	18	314	17.44	13	215	16.54	99	146.0%	
共通科目	体育学A(実技・1単位)	48	1,569	32.69	47	1,606	34.17	▲37	97.7%
	体育学B(講義・2単位)	1	83	83.00	1	68	68.00	15	122.1%
	情報学	14	829	59.21	14	834	59.57	▲5	99.4%
	統計学	9	578	64.22	9	533	59.22	45	108.4%
	共通科目 小計	72	3,059	42.49	71	3,041	42.83	18	100.6%
外国語を除く教養科目 合計	207	13,227	63.90	211	12,825	60.78	402	103.1%	
うち論文指導(主題別・一般教育演習)小計	40	738	18.45	42	699	16.64	39	105.6%	
外国語科目	英語	153	4,958	32.41	152	4,934	32.46	24	100.5%
	ドイツ語	28	919	32.82	29	1,035	35.69	▲116	88.8%
	フランス語	13	464	35.69	13	483	37.15	▲19	96.1%
	ロシア語	5	86	17.20	5	66	13.20	20	130.3%
	スペイン語	6	246	41.00	6	249	41.50	▲3	98.8%
	中国語	21	809	38.52	23	711	30.91	98	113.8%
	韓国語	5	195	39.00	5	172	34.40	23	113.4%
	外国語科目 小計	231	7,677	33.23	233	7,650	32.83	27	100.4%
外国語演習	英語演習	56	1,100	19.64	56	1,050	18.75	50	104.8%
	ドイツ語演習	12	236	19.67	16	261	16.31	▲25	90.4%
	フランス語演習	8	167	20.88	13	213	16.38	▲46	78.4%
	ロシア語演習	6	44	7.33	6	51	8.50	▲7	86.3%
	スペイン語演習	5	86	17.20	6	92	15.33	▲6	93.5%
	中国語演習	18	281	15.61	17	240	14.12	41	117.1%
	韓国語演習	5	109	21.80	6	66	11.00	43	165.2%
	外国語特別演習	15	220	14.67	11	113	10.27	107	194.7%
	外国語演習 小計	125	2,243	17.94	131	2,086	15.92	157	107.5%
外国語 合計	356	9,920	27.87	364	9,736	26.75	184	101.9%	
基礎科目	線形代数学	26	1,408	54.15	26	1,336	51.38	72	105.4%
	微分積分学	28	1,559	55.68	28	1,670	59.64	▲111	93.4%
	数学概論	1	25	25.00	1	10	10.00	15	250.0%
	数学 小計	55	2,992	54.40	55	3,016	54.84	▲24	99.2%
	基礎物理学・物理学	28	1,724	61.57	30	1,732	57.73	▲8	99.5%
	基礎化学・化学	30	1,772	59.07	30	1,847	61.57	▲75	95.9%
	基礎生物学・生物学	18	1,333	74.06	18	1,334	74.11	▲1	99.9%
	基礎地学	4	462	115.50	4	524	131.00	▲62	88.2%
	理科 小計	80	5,291	66.14	82	5,437	66.30	▲146	97.3%
	心理学実験	4	105	26.25	4	107	26.75	▲2	98.1%
	自然科学実験(2単位)	18	1,028	57.11	18	1,023	56.83	5	100.5%
	基礎実験(旧カリ:1単位)	2	2	1.00	6	7	1.17	▲5	28.6%
実験 小計	24	1,135	47.29	28	1,137	40.61	▲2	99.8%	
基礎科目 合計	159	9,418	59.23	165	9,590	58.12	▲172	98.2%	
日本語・日本事情	1	17	17.00	1	22	22.00	▲5	77.3%	
全学教育科目 2学期合計	723	32,582	45.07	741	32,173	43.42	409	101.3%	
全学教育科目 1学期合計	876	41,587	47.47	870	39,857	45.81	1,730	104.3%	
全学教育科目 1・2学期合計	1,599	74,169	46.38	1,611	72,030	44.71	2,139	103.0%	

2011 (平成 23) 年度 全学教育部・総合教育部行事予定表

	【日(曜日)】	【行事】
4月	1(金)～6(水)	新入生定期健康診断
	7(木)	新入生オリエンテーション・総合教育部ガイダンス
	8(金)	入学式
	11(月)	履修調整ガイダンス・教育情報システム(ELMS)ガイダンス
	12(火)	第1学期授業開始日
	12(火)～18(月)	抽選科目の申込期間(Web入力)
	20(水)	抽選科目の結果発表日及び追加申込日
	21(木)～27(水)	平成18～23年度入学者履修届 Web入力
	21(木), 22(金)	平成17年度以前入学者履修届受付
	6月	2(木)
2(木)～5(日)		大学祭[2(木), 3(金)は休講]
8(水)～10(金)		履修登録した科目の取消し受付
7月	31(日)	オープンキャンパス
8月	1(月)	オープンキャンパス[1(月)は通常通り授業を行う]
	2(火)	初習外国語統一試験日(通常授業は休講)
	3(水)	水曜日の授業終了日
	8(月)	月曜日の授業終了日
	9(火)	火曜日の授業終了日
	10(水)	授業を行わない日
	11(木)	木曜日の授業終了日
	12(金)	金曜日の授業終了日(第1学期授業終了日)
	15(月)～9月27日(火)	夏季休業日
	16(火)	成績報告締切(非常勤[帳票])
	22(月)正午	成績報告締切(常勤[Web入力])
	29(月)	平成18～23年度入学の全学教育科目学修簿 Web上公開
	29(月)～9月2日(金)	全学教育科目成績確認及び成績評価に関する申立て期間
	29(月)～9月27日(火)	自由設計科目登録変更期間
	9月	上旬～中旬
26(月)・27(火)		学部紹介・学部移行ガイダンス
28(水)		第2学期授業開始日
28(水)～10月4日(火)		抽選科目の申込期間
10月	6(木)	抽選科目の結果発表日及び追加申込日
	7(金)～13(木)	平成18～23年度入学者履修届 Web入力
7(金), 11(火)	平成17年度以前入学者履修届受付	
11月	20(日)	AO入試・帰国子女入試
12月	7(水)～9(金)	履修登録した科目の取消し受付
	27(火)～1月4日(水)	冬季休業日
1月	5(木)	授業再開
	13(金)	センター試験準備(休講)
	14(土)～15(日)	大学入試センター試験
	26(木)	木曜日の授業終了日
	31(火)	火曜日の授業終了日
	2月	1(水)
2(木)		初習外国語統一試験日(通常授業は休講)
3(金)		金曜日の授業終了日
6(月)		月曜日の授業終了日(第2学期授業終了日)
7(火)・8(水)		学部移行ガイダンス
9(木)		“成績報告締切(常勤[Web入力],非常勤[帳票])”
16(木)		平成18～23年度入学の全学教育科目学修簿 Web上公開
16(木)～20(月)		成績評価に関する申立て期間
16(木)～22(水)		全学教育科目成績確認,自由設計科目登録変更期間
25(土)～26(日)		北海道大学第2次入学試験(前期日程)
28(火)		成績確定
29(水)午前		進級判定/進級要件単位充足判定
3月	12(月)	北海道大学第2次入学試験(後期日程)

注)平成20年度から,補講期間,定期試験期間及び追試験期間が廃止されました。

平成 23 年度クラス担任マニュアルを発行

平成 23 年 3 月中旬に「平成 23 年度クラス担任マニュアル」(改訂版)が発行され(写真 1), 3 月 16 日に開催されたクラス担任等連絡会の説明に利用されました。クラス担任ならびに副担任の先生方は、今後 1 年間のクラス運営にこのマニュアルを大いに活用していただきたいと思います。

平成 23 年度版は 73 頁におよぶ立派な冊子で、1) 北海道大学教育倫理綱領、2) 北海道大学基礎クラス担任制度の実施に関する要項、3) 事故や事件が発生した場合の対応、4) クラス担任の支援体制、5) クラス担任の主な役割、6) 学生の生活指導、7) 主な学生相談の内容と対応、8) 総合入試関係資料、9) 各種一覧表、10) 「心のケア」対応マニュアルなどの内容から成っています。学生からのさまざまな相談事への対応について具体的に記されているのが特徴です。この冊子は今後も改訂され、毎年クラス担任・副担任に配布される予定です。

歴史をさかのぼると、クラス担任マニュアルは、メンタルケア、修学指導などでクラス担任の役割が増大するのに対応して、クラス担任からの要望もあり、平成 16 年度にはじめて作成されました。当時は、修学・履修指導関係と学生支援関係の 2 つの内容で構成される 11 頁程度のプリント資料でした。

それ以降、平成 18 年度版まで同様の体裁・構成でしたが、クラス担任へのアンケート調査でマニュアルの改善を求める意見があったことから、平成 19 年度版に向けて、学生委員会と協力して WG を設置し、改訂版を作成しました。その時の WG メンバーには、3 人のクラス担任代表をはじめ、安藤厚教育改革室役員補佐(当時)、小野寺彰全学教育小委員会委員長(同)、大畑昇学生相談室長(同)、武蔵学保健管理センター長が参加されていました。この時から「クラス担任の心得と役割」が明示され、保健管理センター(現保健センター)発行の「心のケア対応マニュアル」や「学生の事故が発生した場合の対応」を示すフローチャートが加えられました。これが今のマニュアルの原型になっています。

平成 21 年度版の作成にあたって、複数年度使える内容の冊子の作成を目指す一方、オリエンテー

ションや学部ガイダンスの実施要領等、毎年度変わる内容は別に印刷することになり、近久武美学生相談室長を中心に WG で検討して、平成 22 年度版から冊子化が実現しました。この冊子は、内容が充実していると他大学の関係者の間でも話題になったと聞きます。

平成 23 年度版では新たに総合入試等への対応が必要となり、WG で検討して改訂版が発行されました。今後もクラス担任アンケートなどのご意見を踏まえて毎年改訂に努めますが、総合教育部の学生支援体制がある程度落ち着いた時点からは隔年で更新すること、これを発展させて全教員に役立つ「学生支援マニュアル」を作成することなども検討課題になります。

(この紹介文は学務部学生支援課加福課長補佐の情報に基に総合教育部長山口淳二が作成しました)

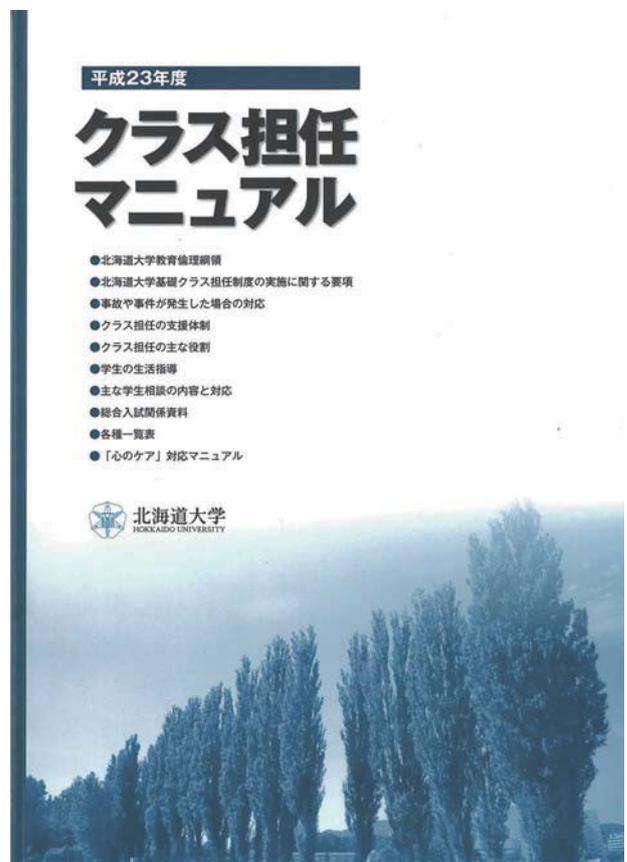


写真 1 平成 23 年度クラス担任マニュアル

高等教育 HIGHER EDUCATION

香港大学での国際会議

Enhancing Learning Experiences in Higher Education: International Conference 2010 に参加して

2010年12月2～3日、香港大学で表記の国際会議が開催されました。この大会の目的は、教育関係者や学生が一同に集まる場を提供し、今後の高等教育の発展につながる実践報告や現在のトレンドを共有することです。

香港大学の Centre for the Enhancement of Teaching and Learning (CETL) が主催し、アジアの中心らしい活気のある雰囲気で行われました。それは全体会が香港大学の学生による歌とダンスではじまるという意外性にも表れていました。(写真1)

基調講演では、これからの教育法やFDはより効果的に行われるべきで、証拠 (evidence) を集めながら継続的な実践が大事であり、現在の世界の多様さ・貧困格差の中、社会的・倫理的公正を学生に伝えるには、教育現場における多様性を利用することが解決の糸口となることなどが述べられました。

分科会は、「高校から大学への移行と初年次での経験」「カリキュラムを通したリテラシー教育」「体験学習と課外学習」など、学生の大学生活に密接なサブテーマが多く設定されていました。

たとえば、日本の高校までの修学レベルが高いことに注目し、高校のどの教科の成績が大学の EAP

(English for Academic Purposes) の得点と相関があるかを調査した発表があり、EAP のリーディングの得点はほとんどの高校の教科の成績と相関が高く、リスニングはあまり相関が見られないそうです。

クリッカーや Moodle (CMS) の実践報告が行われた分科会には、近代的にデザインされ、IT 設備が完備された部屋が用意されていました。この報告事例では、Moodle をカリキュラム・クラスごとの自由に質問し合える掲示板として活用し、ノンネイティブの学生が英語の語彙の使い方を質問するなど、気軽に利用できる環境となっているようです。書き込みをしない学生も閲覧はしていることが多く、まわりの学生がどのように問題を解決してゆくのかを見ることができ、参考になっているそうです。

その他にも学生による自分の大学をより良くするための研究計画など多彩な分科会が行われました。

英連邦諸国からの参加者が多く、南アフリカ、スコットランドなど、我々には馴染みのうすい地域の大学での取組についても聞くことができました。それらの地域でも、教育改善の課題と方略はほぼ共通なのが印象的でした。(山田 邦雅)



写真1 香港大学国際会議・全体会の様子



写真2 香港大学の風景

5つの報告書等を発行

高等教育開発研究部門では、3月に5つの報告書等を刊行し、全学の教員に配布しました。

次世代FDとIRの重要性については、ニュースレター第85号の巻頭言をご覧ください。

「学生調査2009年」北海道大学を中心とした比較分析報告書 (写真1)

IR活動の一環として昨年度実施した初年次学生調査の分析結果です。本調査は同志社大学、甲南大学、大阪府立大学でも実施され増した。全体の報告書は、以下をご覧ください。

<http://www.irmw.jp/report2009.html>

本報告書では、北大の学生と他の3大学の学生を比較して、学生の学習状況、英語能力の習得状況、大学生活への意識など21項目の質問から、北大の学生の特徴が浮き彫りにされています。

<http://socyو.high.hokudai.ac.jp/freshmansurvey09.pdf>

「次世代FDの研究」報告書 (写真2)

本部門では、過去3年間にわたり今後必要となるFDの全体像を探り、研究と試行を重ねてきました。172ページに及ぶこの報告書はその集大成で、海外や国内の事例研究をはじめ、TA研修の拡充、中堅教員向け教育改善マネジメントFD、教育倫理綱領、シラバスや授業の改善、IT活用支援、北海道地区FD・SD推進協議会、IR活動、学習支援、OCW活用、国際化支援FD等について報告し、最後に「次世代FD」への提言が述べられています。

<http://socyو.high.hokudai.ac.jp/jisedai.pdf>

全学教育ティーチング・アシスタントマニュアル (改訂第3版) (写真3)

機構では全学教育担当のTAを対象とした研修会を毎年4月初旬に開催しています。このマニュアルは、その際に配布され使用されます。これまで3年ごとに改訂され、今回は第3版で、今年から導入された総合入試や総合教育についての説明が加えられ、全体で180ページとなりました。

<http://socyو.high.hokudai.ac.jp/TAmanual2011.pdf>

高等教育ジャーナル第18号 (写真4) 特集：北海道大学の「国際化」を求めて

毎年この時期に出版している論文誌です。学内外からの投稿論文で構成されています。今号では「国際化」特集を組み、本学の国際化に関する論文・報告をまとめて掲載しました。また、ジャーナル自体の国際化にも取り組み、投稿要領の英語表示、英文論文の増加などの努力をしました。今後とも多くの英文論文が投稿されることを期待しています。

啓蒙カード：北海道大学教育倫理綱領と北海道大学における科学者の行動規範 (写真5)

北海道大学では、2009年6月に表記の倫理綱領ならびに行動規範が定められました。今回は、中期目標・中期計画に基づき、倫理綱領の啓蒙を図るカードを印刷し、全教員に配布しました。倫理綱領については、センターニュース第80号をご覧ください。

<http://socyو.high.hokudai.ac.jp/cnews/80.pdf>

(細川 敏幸)

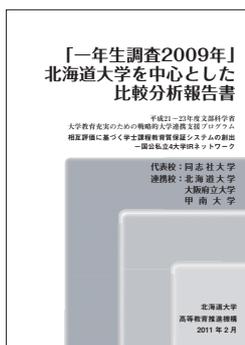


写真1



写真2

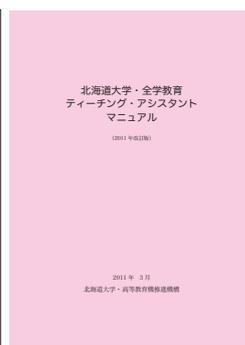


写真3



写真4



写真5

生涯学習 LIFELONG LEARNING

2010 年度北海道地区大学 SD 研修・大学職員セミナー 「大学職員の意識改革とキャリア形成」を開催

大学職員セミナーは、大学職員が教員とともに大学改革の重要な担い手としてその専門性を高める学習・研修の場として、2006 年度から 2008 年まで北海道大学公開講座として 3 回開催してきました。

2009 年度からは北海道地区大学 SD 研修「大学職員セミナー」として、北海道地区 FD・SD 推進協議会の発足準備と並行して取り組み、道内の大学、私立大学協会の協力も得て実施しています。

2010 年度の大学職員セミナーは、教育学研究院、高等教育推進機構・生涯学習計画研究部門、総務部人事課及び学務部教務課の主催で、10 月 13～14 日、百年記念会館を会場として開催されました。

「大学職員の意識改革とキャリア形成」のテーマのもと、本学職員 14 名を含む、道内の国公私立大学、短期大学、高等専門学校から 52 名の受講生が参加しました。参加者の内訳は、男性 42、女性 10 でした。女性の参加者が 10 名に達したのは、今回は宿泊研修とはしなかったことと関連していると思われる。年齢は 40～49 歳が 18 名、30～39 歳 17 名、20～29 歳 13 名でした。大学事務職員としての経験年数は 5 年未満が 18 名と最も多く、現在の仕事は教務・学生支援系が 24 名で最も多く、次いで財務系 11 名、総務・企画系 8 名でした。

1 日目は、まず福島一政氏（愛知東邦大学理事）の「大学改革と職員の役割」を主題とする基調講演で、ご自身の日本福祉大学職員時代の経験を踏まえて、大学改革のなかで求められる新たな職員像などをお話いただきました。

次いで中島英博氏（名城大学准教授・高等教育推進機構客員准教授）による、道内国公私立大学の課長職を対象にした面接調査の結果を踏まえた「大学職員はどう育つか」に関する報告ののち、ワークショップを行いました。

ワークショップは 9 グループに分かれ、1 名ずつ教員がファシリテーターとしてつぎました。受講者への事前調査をもとに、(1) 職員意識、職場意識の現状から問題点を探り、(2) それらに対し個々に取

り組むべき改善策を話し合い、(3) それらを進めていくために求められる大学の改革について意見交換を行いました。

1 日目終了後には情報交換会が行われ、普段交流することの少ない、他大学や他部局の受講生同士で親睦を深めました。事後アンケートには「他大学、他職種の人との交流の機会はなかなかないので貴重だった」「私立大学の人との交流の機会はなかなかないので貴重だった」という意見がありました。

2 日目は、佐藤浩章氏（愛媛大学准教授）の、四国地区における先進的な SD の事例などを参考とした「大学職員に求められる能力について考える」というテーマの報告ののち、ワークショップを再開し、最後にグループごとに成果発表を行いました。

事後アンケートでは、参加者の多くは国公私立のさまざまな機関から、経験も年齢も異なる多様な職員が集まって、職場を離れた「ふり返し」と「気づき」の機会が貴重だったとの感想がありました。

この取組を継続的に行い、職域別や経験別に多様な研修としていくためにも、現在の大学職員の研修の実態などについてデータ収集が不可欠です。研究成果にもとづくプログラムづくりが、大学 SD らしい取組として発展していくための条件です。

(木村 純)



写真1 大学職員セミナー・ワークショップの様子

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

32名に受講証明書を交付

～平成22年度高大連携授業聴講型公開講座～

本年度第2学期の全学教育科目を受講した6校（札幌旭丘，札幌北，藤女子，札幌南，札幌西，札幌開成）の計32名の高校生が、基準を満たして受講証明書の交付を受けました。受講終了後に実施した受講生調査及び科目担当教員調査の結果の一部を紹介します。

受講生調査

受講を完了した生徒全員が「高等学校では学べないことが学べた」、受講した目的を「とても」または「ほぼ」達成したと回答し、受講の有用性について、図1に示したように高く評価しています。

27名（84.4%）が授業内ミニレポートや宿題などを「すべて」または「だいたい」提出した、20名（62.5%）が授業内容を「理解できた」、23名（71.9%）が図書館を利用した、31名（96.9%）が北大での受講と高等学校の勉強や学校行事とを「うまく」または「なんとか」両立できた、と回答しています。北大への進学に対する気持ちの変化については、「非常に強くなった」が4名（12.5%）、「や

や強くなった」が11名（34.4%）でした。「もっと多くの生徒に受講してほしい」「また受講したい」などの声もありました。

学期開始後1ヶ月目の継続意思の確認で、6名が高等学校の勉強やクラブ活動との両立が難しいとの理由で受講を取り消しましたが、全員が受講体験は「とても有意義だった」と回答しています。

科目担当教員調査

高校生が受講した22科目のうち、20科目35名（講義担当者全員が回答した総合科目あり）の先生方から回答が寄せられました。高校生の聴講に関して、34名（97.1%）が「支障がなかった」、授業の内容やすすめ方については、「ほとんど変えなかった」が30名、「少し」または「多少変えた」が5名でした。高校生の受講態度については、「よかった」が15名（42.9%）、「普通」が10名（28.6%）、「よくなかった」が1名、「わからない」が1名との回答でした。今後の担当する全学教育科目への高校生の受け入れについては、「はい」が33名（94.3%）

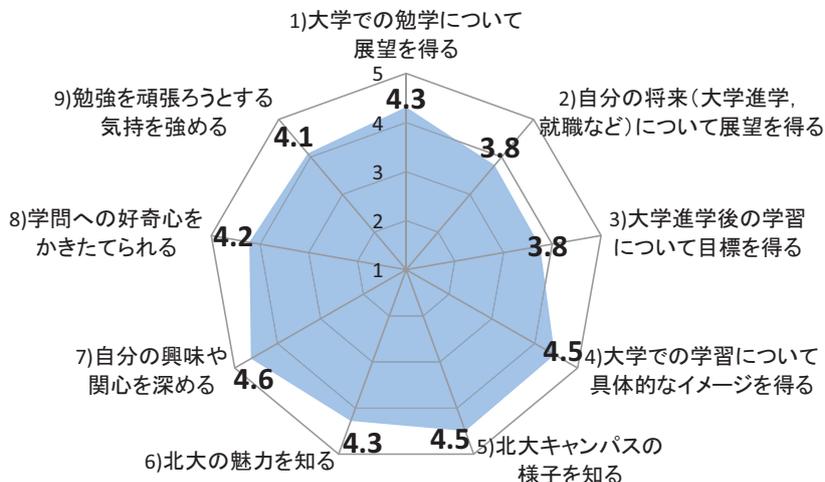


図1 受講の有用性に関する質問項目（5段階尺度）の平均値

「いいえ」が1名,「わからない」が3名でした。本学は高校生への単位認定は行いませんが,北大本と同じ基準で良〜秀に相当するとのフィードバックをいただいた生徒もかなりいました。

授業聴講型公開講座は高等学校からの期待も大きく,高校生の聴講をお認め下さった先生方の多大なご配慮とご協力に感謝申し上げます。今後も実証的なデータに基づき本事業の効果を考察していきたいと思えます。
(山岸みどり)

科学技術コミュニケーション CoSTEP

2010年度における CoSTEP の地域連携活動

～札幌市青少年科学館との協同プロジェクト～

CoSTEP では今年度,地域との連携活動の一環として,札幌市青少年科学館科学館と協同で二つのプロジェクトを実施しました。

1. 科学館通信『くろすかつぷりんぐ』の企画・制作

一つめのプロジェクトは,実習授業「科学館通信」企画・制作実習」です。5名の受講生が,青少年科学館の広報誌『くろすかつぷりんぐ』を企画・制作し,2011年1月29日に3000部の冊子が完成しました。プロジェクトの期間中は,青少年科学館の職員の方にヒアリングを行ったり,施設を見学・取

材させていただいたり,科学館の概要についてレクチャーをしていただくなど,幅広いご協力をいただきました。

『くろすかつぷりんぐ』は,CoSTEP と科学館の双方のリソースを生かしつつも,科学館の紹介を全面的に押し出すのではなく,読み進む中で科学への関心を呼び起こすことを意識して編集しました。

科学に関心が薄いのはどういう層か? その人たちの関心を引き出すには? どんな記事がよいのか? 手法は? 雰囲気は? 配布場所は? 自分たちにしか作れない,科学の広報誌とは?

さまざまな議論を重ね,科学ファン,科学館ファンが比較的少ないと思われる20～34才の女性,いわゆる「F1層」を読者として想定しました。

彼女たちの生活空間にとけ込み,おしゃれでちょっと知的な感性に訴えることができるよう工夫を重ね,カフェや雑貨店が発行する雑誌のような,今までの科学関係の冊子には見られないおしゃれな編集を心がけました。結果として,F1層だけではなく男性でも子どもでも,たくさんの方が楽しめるものに仕上がったのではないのでしょうか。

内容の構成にあたっては,ふだん身近にあるものでも少し見方を変えることで科学への興味や洞察に結びつくのではないかという観点から,「感じる」「驚く」「考える」「夢見る」の4つの視点を入りに,科学の面白さや楽しみ方を新たに発見してもらうことをコンセプトとしました。このコンセプトを表現



写真1 くろすかつぷりんぐ

するために、2010年のノーベル賞を受賞された鈴木章先生の“2種類の異なる物質を組み合わせて新しいものを作り出すことができる”「クロスカップリング」反応にかけあわせて、冊子のタイトルを『くろすかつぷりんぐ』としました。

冊子の配付に当たっては、F1層の方々目に触れやすいように、科学館だけではなく、周辺のカフェや美容室などにも置いてもらっています。

『くろすかつぷりんぐ』は、札幌市青少年科学館の職員の方々にもたいへん高い評価をいただきました。また、全国の理工系博物館・科学館にもアンケートの回答依頼とともに冊子を郵送しましたが、これまでの回答結果によると、概ね高い評価をいただいています。

2. 絶滅危惧種を考えるデザインワークショップ

二つ目のプロジェクトは、「グラフィックデザイン」実習の受講生が中心となって企画し、2011年2月27日に青少年科学館で実施したデザインワークショップです。

ワークショップでは、小中学生合計32名の参加者に、絶滅が危惧されている北海道の動物のモビールを制作してもらいました。すべての生命は多様で複雑なバランスのなかで共存しています。多種多様な生命のバランスを守り、豊かな環境を次の世代へ引き継ぐためにはどうしたらよいか？さまざまな「バランス」を表現するモビール制作を通じて、そのような生命のバランスを考えるきっかけを提供す

ることをねらいとしています。

ワークショップは、まず日本野鳥の会会員でもある受講生の鈴木幸弥さんによる簡単なレクチャーからスタートしました。札幌駅JRタワーの屋上、まさに都心のど真ん中からハヤブサが餌を狙っている様子を映像で紹介すると、子供たちからは「へー、すごい！」と大きな歓声が上がりました。はじめて見るシマフクロウのぎこちない狩りの様子にも食い入るように見入っていました。

レクチャーが終わるといよいよモビールづくりです。オオワシ、エトピリカ、シマフクロウなどたくさんイラストの中から自分の気に入った鳥を選び、切り抜いていきます。切り取った紙には、環境や自然と共生していくためのメッセージを書き込んでもらいました。そして最後に、全員のモビールを“バランスよく”つり下げました。絶滅危惧に指定されている動物だけではなく、エサとなる動植物の環境も重要であり、あらゆる生命はモビールのように絶妙なバランスを保ちながら共存していることをこのワークショップを通して考えてもらえたのではないかと思います。

3. おわりに

CoSTEPでは、今年度の札幌市青少年科学館との協同プロジェクトの経験を活かし、来年度も、地域との連携活動を展開する予定です。具体的には、千歳市の科学教育関係者と連携しながら、大学と地域の連携スキームを構築・提案していく実習を計画しています。
(石村 源生)

研究部 RESEARCH

高等教育研究部 4部門合同研究報告会を開催

高等教育機能開発総合センター当時から毎年実施してきた、高等教育研究部の4研究部門の合同研究報告会が3月18日(金)の午前に情報教育館で開催されました。

報告は、山岸みどり教授(入学者選抜研究部門)「高大連携授業聴講型公開講座の現状と課題」、瀧澤一騎准教授(生涯学習計画研究部門)「食べて勝つプロジェクトの現状と課題」、細川敏幸教授(高等教育開発研究部門)「次世代FDとIRについて」、杉山滋郎教授(科学技術コミュニケーション教育研究部門)「映像で広がる科学技術コミュニケーション」でした。(写真1)

山岸教授は、試行を経て平成21年度から本格的に始まった「高大連携授業聴講型公開講座」の意義と今年度の実施結果について報告しました。瀧澤准教授は、食事が大切なことはわかっているにもかかわらず十分な食事管理ができない学生アスリート向けに、大学生協と共同で実施した食事指導の成果について報告しました。大学生協の中村専務理事の発言もありました。細川教授は、この3年間の次世代FDに関する研究成果とIR研究の進展状況について、杉山教授は、科学・技術に関する映像作品の制作体験を取り込んだ授業の実践について報告しました。(木村純)



写真1 4部門合同報告会の様子

教育支援 EDUCATIONAL SUPPORT

2010年度第2学期 学習サポートの利用状況

アカデミック・サポートセンターでは、第1学期に引き続き「学習サポート」を実施し、センターのスタッフと大学院生チューターが、主に全学教育科目の学習方法や授業課題などに関する質問・相談に、個別対応でアドバイスを行いました。

第2学期は、数学、物理などの基礎科目と、英語、中国語などの外国語科目、また文章添削や情報学といった基礎的スキルの担当時間を設け、10月4日から2月9日まで実施しました。

期間中の利用状況は表1の通りです。

表1 2010年度第2学期学習サポート利用状況

	全体	1日平均
利用件数	292	3.4
利用人数	305	3.6
利用時間	229時間	2.7時間

利用者の9割は1年生で、半数以上は複数回の利用者でした。科目別では数学や物理の質問が多く、主に理系の学生に活用されています。こうした傾向は第1学期とほぼ同じですが、相談時間は第2学期の方がやや伸びています。チューターが単に質問の答えを解説するのではなく、学生自身に疑問点を説明させたり、その場で計算させたりして、丁寧なアドバイスを心がけた結果が出ているようです。

学習サポートは新年度から新しい学習サポート・自習室(E211)に移って行きます。(写真1)

また、チューターへの研修を充実し、学生にとってより有益な制度となるよう改善します。

ご意見、ご質問などは、アカデミック・サポートセンターまでお寄せください。(斉藤 準)

アカデミック・サポートセンター
 高等教育推進機構 E210
 011-706-7526
<http://asc.high.hokudai.ac.jp/>
 E-mail: asc@high.hokudai.ac.jp



写真1 新しいサポート室 (E211)

アカデミック・マップを公開

アカデミック・サポートセンターでは、総合入試の導入に合わせて学生の主体的な進路選択を支援するために「アカデミック・マップ」を作成しました。

このマップは、北大内で行われている学問分野とキーワードについて、学部・学科等の情報を横断的かつ直感的に理解できるように整理したものです。学生の自発的な情報収集を促すために、マップにはごく簡単な情報と説明しか掲載していません。

マップの基礎データは、各学部の学生便覧、シラバス、パンフレット、ウェブサイト、北海道大学大学情報データベース等から収集した内容を、科研費の学問分野細目とキーワードを参考に分類したものです。この基礎データを元に、学部・学科等ごとの細部を調整し、全学横断的なものとししました。次いで、科研費分類を参考に28のテーマを設け、基礎データと関係する学部・学科等を分類しました。さらに各テーマをそれぞれ3種類のカテゴリーに区分し、基礎データと関係先を整理して「キーワードマップ」としました。同時に、各学部・学科等の情報も「各学部の研究紹介」としてまとめ、各種のデータを加え、「アカデミック・マップ2011」という冊

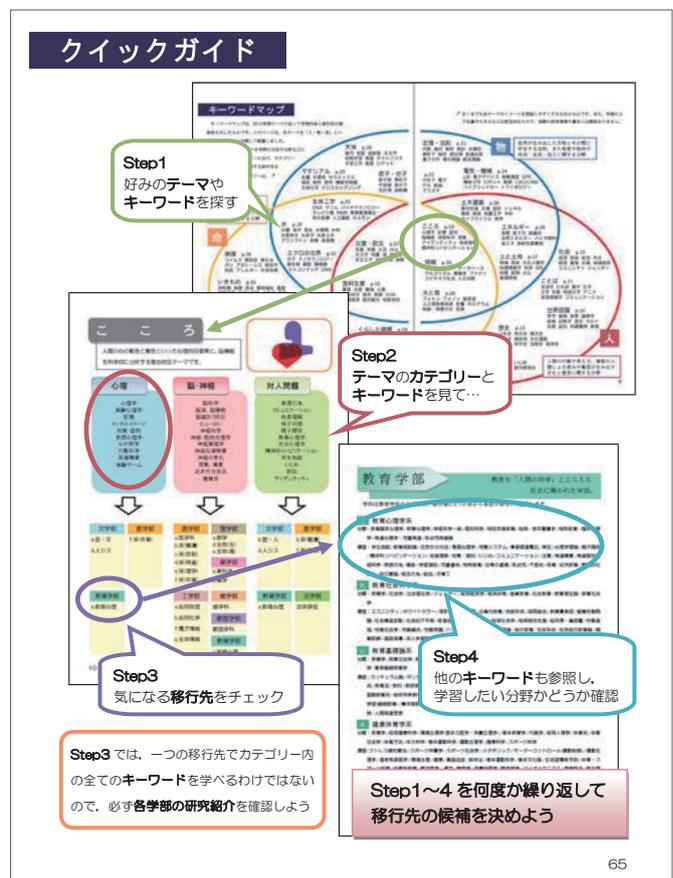


写真1 マップの使い方(冊子より抜粋)

子として発行しました。(写真1)

この冊子は主に新入生に配布するほか、ウェブサイトからも pdf 形式でダウンロードができます。また、この冊子のデータを元にウェブ上でキーワード検索等の機能を備えたオンライン版のマップを構築し、4月から公開する予定です。

学科ごとのキーワードの選択等、マップの内容については、あらかじめ各学部へ原案を送付して適切な修正をいただいておりますが、何分初めての作成で、まだまだ修正点等があるかと思えます。お気づきの点は、できるだけ学科単位でアカデミック・

サポートセンターまでお寄せください。オンライン版については随時、冊子体については次年度改訂版で修正いたします。このアカデミック・マップをよりよいものにするためにも教員のみならずのご協力をよろしくお願い申し上げます。

(岡崎 裕剛・前田 展希)

アカデミック・マップについてのご意見・お問い合わせ
 アカデミック・サポートセンター (岡崎・前田)
 (内)7526
 E-mail: asc@high.hokudai.ac.jp

北海道大学オープンコースウェアの新規公開科目 (2010年9月～2011年3月)

2010年9月～2011年3月には、北海道大学オープンコースウェア(北大OCW)スタッフが中心となって積極的に映像収録・編集作業を行い、全学教育科目8、大学院教育科目2、公開講座等36の計46コースを新たに公開することができました。

この中にはノーベル化学賞を受賞された鈴木章名誉教授の講演映像が含まれています。

来年度も引き続き講義資料や映像等を収集・公開し、高等教育機関における「知」の創造と提供に貢献していくつもりです。(合川 正幸)

表1 北大OCW 新規公開科目一覧 (2010年9月～2011年3月)

<p>●全学教育科目 (8 コース)</p> <p>英語 II 奥 聡 英語演習 上級: War History and Memory in Japan Phillip SEATON 環境と人間 北大総合博物館で学ぼう、ヒグマ学入門 天野 哲也ほか 芸術と文学 パイプオルガンとその音楽 藤原 一弘 (洗足学園音楽大学) 芸術と文学 ピアノ音楽の楽しみ・魅力 渡辺 健二 (東京芸術大学) 芸術と文学 ロシア音楽の魅力 高橋 健一郎 (札幌大学) 芸術と文学 札幌と音楽文化 三浦 洋 (北海道情報大学) 特別講義 大学と社会 亀野 淳</p> <p>●大学院教育科目 (2 コース)</p> <p>理学院 博物館コミュニケーション特論 天野 哲也ほか 環境科学院 Dynamics of ice sheets and glaciers Ralf Greve</p> <p>●トピックス (2 コース)</p> <p>ノーベル賞 精進努力で“鈴木カップリング”を見つけた！ 鈴木 章 ノーベル賞 ノーベル化学賞受賞記念講演会 鈴木 章</p> <p>●公開講座/セミナー (34 コース)</p>	<p>サイエンス・カフェ札幌 下を向いて歩こう♪ 柴田 英昭 サイエンス・カフェ札幌 森の上の雲 杉本 敦子 サイエンス・カフェ札幌 知性が生まれるとき 上田 哲男 サイエンス・カフェ札幌 コミュニケーションする脳！？ 津田 一郎 サイエンス・カフェ札幌 化石に秘められたミステリー 小林 快次 最終講義 小さな夢を見つけて 藤川 重雄 最終講義 氷の格子欠陥 本堂 武夫 サステナビリティ・ウィーク インフルエンザなどの人獣共通感染症を克服する～統合科学実験展示～ 総合博物館 サステナビリティ・ウィーク サステナビリティ水産科学の理論と実践 大学院水産科学研究院 サステナビリティ・ウィーク みんなで考えよう 環境健康科学研究教育センター サステナビリティ・ウィーク 鳥、ブタ、そしてパンデミックインフルエンザ騒動を斬る 喜田 宏 サステナビリティ・ウィーク 都市・農村の地域連携を基礎とした低炭素社会のエコデザイン サステナビリティ学教育研究センター サステナビリティ・ウィーク 崩壊する地球生態系を救えるか？ サステナビリティ学教育研究センター サステナビリティ・ウィーク 明日の海と食を守る水産海洋サステナビリティ学 帰山 雅秀ほか</p>
---	--

セミナー／講演会 第17回北海道大学教育ワークショップ
 高等教育推進機構
 土曜市民セミナー トリニダードトバゴ共和国の歴史と文化、自然 Roshan Mahabir
 土曜市民セミナー 博物館における映像情報デザイン 藤田 良治
 土曜市民セミナー 北海道の背骨の生い立ちを探る 在田 一則
 ひらめき☆ときめきサイエンス タンパク質の結晶を作ろう 田中 勲
 ひらめき☆ときめきサイエンス ようこそ不思議な細菌の世界へ！ 山口 博之
 プロフェッサー・ビジット 見えない光、赤外線を利用する太陽電池 三澤 弘明
 プロフェッサー・ビジット 循環型社会と低炭素社会 吉田 文和
 プロフェッサー・ビジット 美しいかけがえのない水環境を

いつまでも 岡部 聡
 人文学カフェ 渡る使節はニセばかり 橋本 雄
 人文学カフェ 増える鹿、減るトナカイ 立澤 史郎
 土曜市民セミナー 私達と自然エネルギーの未来 伊藤 雄三 (日本科学者会議会員)
 土曜市民セミナー 法医学と博物館 寺沢 浩一
 北海道大学教育 GP CoSTEP これまでとこれから 杉山 滋郎
 北海道大学教育 GP 看護学教育における OSCE の実際 中村 恵子 (札幌市立大学)
 北海道大学教育 GP 教育の改革と将来像 脇田 稔
 北海道大学教育 GP 大学院における高度博物館学教育の実践 青木 豊 (國學院大学)
 北海道大学教育 GP 大学博物館から拓く学生教育の未来3 総合博物館
 北海道大学教育 GP 博物館で個性が活かせる授業を創ろう！ 池田 文人
 北海道大学公開講座 北海道の雇用を創る 亀野 淳

日誌 EVENTS, December-March

12月

- 1～5日 ・(調査) 香港大学
- 3日 ・(会議) 第59回教務委員会
- 3日 ・(会議) 第59回教務委員会
- 6日 ・(会議) 入学者選抜委員会
- 7日 ・(行事) AO入試 (大学入試センター試験を課さない) 合格者発表
- ・(行事) 帰国子女入試合格者発表
- ・(会議) IRシステム構築部会 (TV会議)
- ・(行事) 帰国子女入試入学手続
- 10日 ・(会議) 第3回大学院専門委員会 (持ち回り)
- 14日 ・(会議) IRシステム構築部会 (TV会議)
- 17日 ・(会議) 全学教育TA マニュアル編集会議
- 21日 ・(会議) 第1回総合教育移行専門委員会
- 24日 ・(会議) 第7回教育改革室会議

1月

- 5日 ・(会議) 第60回教務委員会
- 6日 ・(会議) 第6回学生会委員会
- 13日 ・(会議) 第1回生涯学習計画研究専門委員会
- ・(行事) ノーベル化学賞講演会
- 15～16日 ・(試験) 大学入試センター試験
- 18日 ・(会議) 第4回高等教育推進機構運営委員会
- ・(会議) IRシステム構築部会 (TV会議)
- 21日 ・(会議) 第3回総合教育教務専門委員会
- 28日 ・(会議) 第8回教育改革室会議

2月

- 7日 ・(会議) 入学者選抜委員会
- 7～8日 ・(来訪) 一橋大学
- 8日 ・(行事) AO入試(大学入試センター試験を課す)合格者発表
- 10日 ・(談話) 平成22年度第1回遠友学舎炉辺談話
- 17日 ・(談話) 平成22年度第2回遠友学舎炉辺談話
- 18日 ・(会議) 第15回生涯学習計画研究委員会公開講座実施部会

- 21日 ・(会議) 第4回総合教育教務専門委員会
- 22日 ・(会議) 第9回教育改革室会議
- 23日 ・(会議) 第2回全学教育専門委員会
- 24日 ・(会議) 第1回高等教育開発研究部門委員会
- 25日 ・(試験) 一般入試 (前期日程)
- ・(会議) 第4回大学院専門委員会 (持ち回り)
- ・(会議) 第2回生涯学習計画研究専門委員会

3月

- 1日 ・(会議) 第7回学生会委員会
- 2日 ・(会議) 第5回高等教育推進機構運営委員会
- ・(会議) 第3回高等教育推進機構学務委員会
- ・(会合) IRシンポジウム (甲南大学)
- 3日 ・(会議) 第61回教務委員会
- 4日 ・(会合) 筑波大学教育 GP 成果報告シンポジウム (秋葉原 UDX シアター)
- 7日 ・(会議) 入学者選抜委員会
- ・(会議) 平成23年度TA研修会第1回打ち合わせ会
- ・(来訪) 弘前大学、立命館大学
- 8日 ・(行事) 一般入試 (前期日程) 合格者発表、私費外国人留学生入試合格者発表
- ・(会議) クラス担任幹事会
- 11日 ・(会議) 第2回総合教育移行専門委員会
- ・(会議) 2010年度戦略的の大学連携事業外部評価委員会 (同志社大学)
- ・(会議) 2010年度IR開発推進評価委員会 (TV会議)
- 12日 ・(試験) 一般入試 (後期日程)
- 16日 ・(会議) クラス担任等連絡会
- 18日 ・(会合) 4研究部合同研究会
- 22日 ・(会議) 入学者選抜委員会
- ・(行事) 一般入試 (後期日程) 合格者発表
- ・(会議) 第8回学生会委員会
- 24日 ・(行事) 学位記授与式 (札幌キャンパス)
- 25日 ・(行事) 学位記授与式 (函館キャンパス)
- ・(会議) 平成23年度TA研修会第2回打ち合わせ会
- 30日 ・(会議) 第10回教育改革室会議

行事予定 SCHEDULE, April-June

	【日(曜日)】	【行事】
4月	1(金)～6(水)	新入生定期健康診断
	6(水)	全学教育 TA 研修会
	7(木)	新入生オリエンテーション・総合教育部ガイダンス
	8(金)	入学式
	11(月)	履修調整ガイダンス・教育情報システム (ELMS) ガイダンス
	12(火)	第1学期授業開始日
	12(火)～18(月)	抽選科目の申込期間 (Web 入力)
	20(水)	抽選科目の結果発表日及び追加申込日
	21(木)～27(水)	平成 18～23 年度入学者履修届 Web 入力
	21(木), 22(金)	平成 17 年度以前入学者履修届受付
6月	2(木)	開学記念行事日 (休講)
	2(木)～5(日)	大学祭 [2(木), 3(金) は休講]
	3(金)～4(土)	全学 FD (教育ワークショップ)
	8(水)～10(金)	履修登録した科目の取消し受付

ニュースレター 2011, No.86 目次

<巻頭言>総合教育部の発足にあたって
 山口 淳二 2
 好調なスタートを切った総合入試 小内 透 4
 FD ワークショップ「教室英語表現の活用法」を工学部
 および獣医学研究科向けに実施 5
 PFF Workshop 2011 6
 理学院における GSI 制度の意義 鈴木 久男 8
 2010 年度理学院 GSI 活動報告と今後の課題
 菊池 右馬 9
 学務委員会等報告 11
 平成 22/21 年度全学教育科目履修者数対比表 14
 平成 21/22 年度全学教育における各部署の授業担当状況
 平成 23 年度全学教育部・総合教育部行事予定表 16
 平成 23 年度クラス担任マニュアルを発行 17
 5 つの報告書等を発行 18

香港大学での国際会議 Enhancing Learning Experiences
 in Higher Education: International Conference 2010
 に参加して 19
 2010 年度北海道地区大学 SD 研修・大学職員セミナー
 「大学職員の意識改革とキャリア形成」を開催 20
 32 名に受講証明書を交付～平成 22 年度高大連携授業
 聴講型公開講座～ 21
 2010 年度における CoSTEP の地域連携活動～札幌市
 青少年科学館との協同プロジェクト～ 22
 高等教育研究部 4 部門合同研究報告会を開催 24
 2010 年度第 2 学期 学習サポートの利用状況 24
 アカデミック・マップを公開 25
 北海道大学オープンコースウェアの新規公開科目 (2010
 年 9 月～2011 年 3 月) 26
 日誌 27
 行事予定・目次・編集後記 28

編集後記

「うさぎさん、編集後記書いてください」と Y 氏がやってきた。
 編集はすでに終わっていた。
 すっかり忘れていたのだ。

未曾有の災害は、多くの人命と財産を奪った。
 私の親友たちも行方がわからない。
 各地の被災地で懸命に支援している人々の姿は、心を打つ。

人は、知らぬ間に様々な人の助けを借りて生きているのだ。
 この当たり前の命題を思い知った、今日この頃である。
 (うさぎ)

ニュースレター (旧「センターニュース」)

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)

通算 第 86 号

発行日： 2011 年 3 月 25 日
 発行元： 北海道大学高等教育推進機構
 (旧高等教育機能開発総合センター)
 〒 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
 電話 (011)706-7520・FAX(011)706-7854
 編集委員： 西森敏之・◎細川敏幸・山田邦雅
 木村純・亀野淳・三上直之・瀧澤一騎
 山岸みどり・鈴木誠・池田文人
 ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
 電話：(011)706-7514・FAX(011)706-7521

インターネットホームページ： <http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>